

始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

精製

大阪 岡本偉業館



石川一 講演

武藏 豊前島大仇討  
後編





石川一口講演

精製

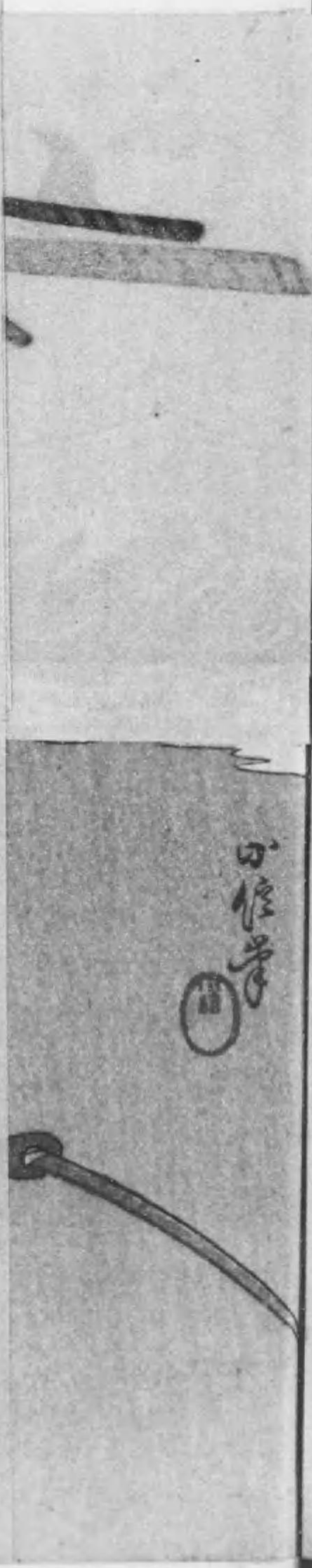
武藏後編

豊前島大仇討

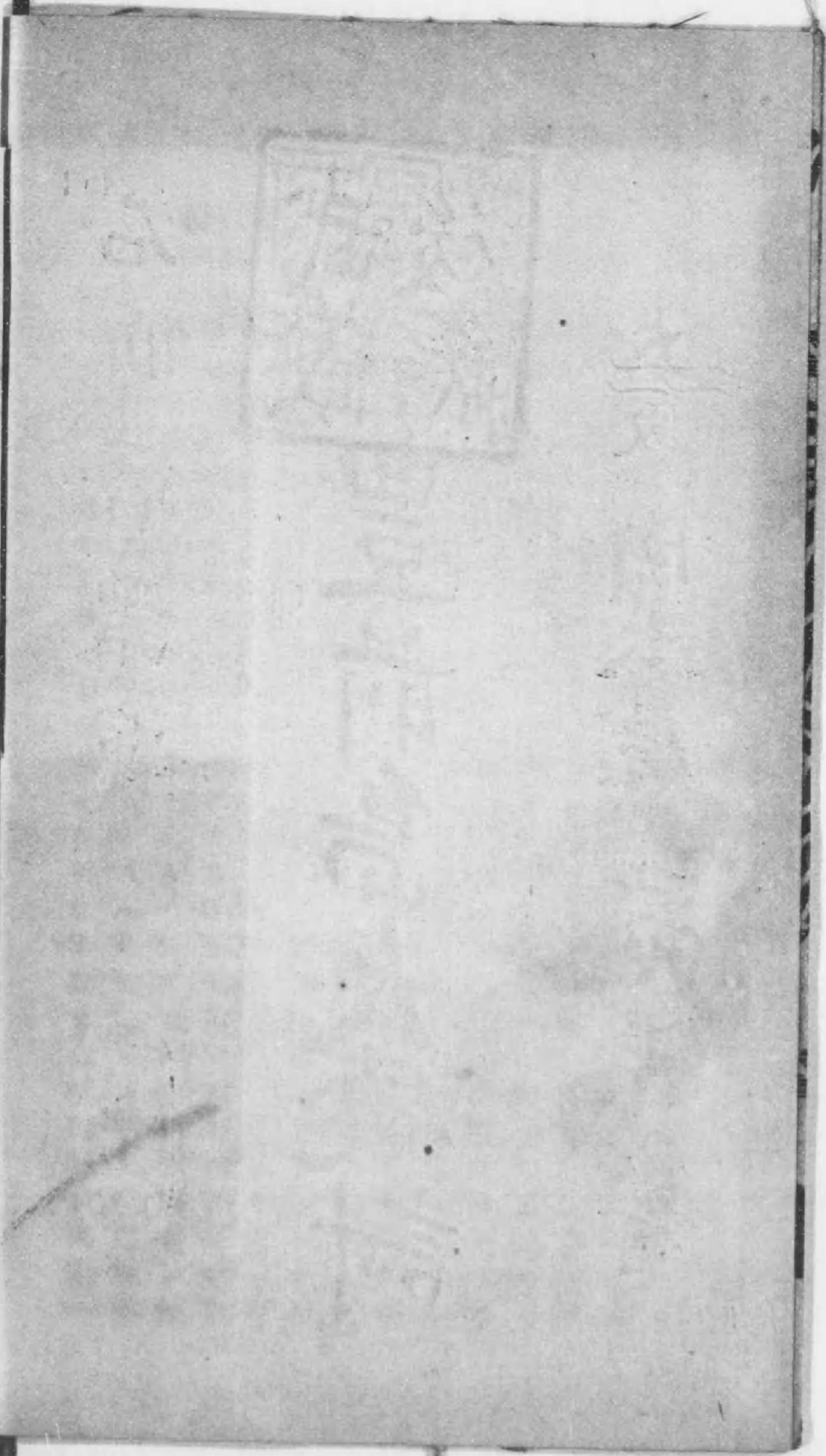
大正  
4. 12. 7  
内交

大阪 岡本偉業館發行

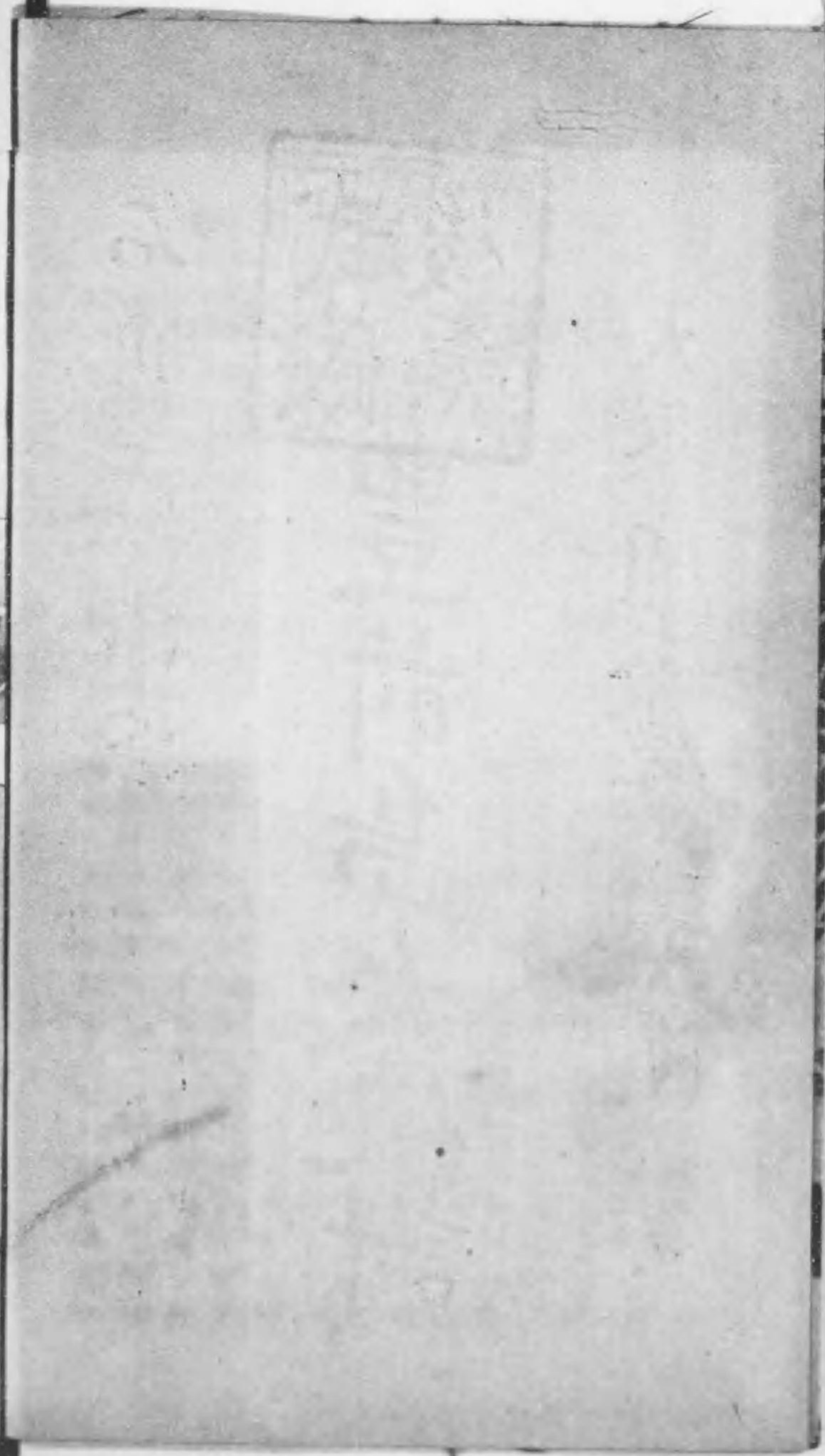




白  
信  
堂  
印







3012



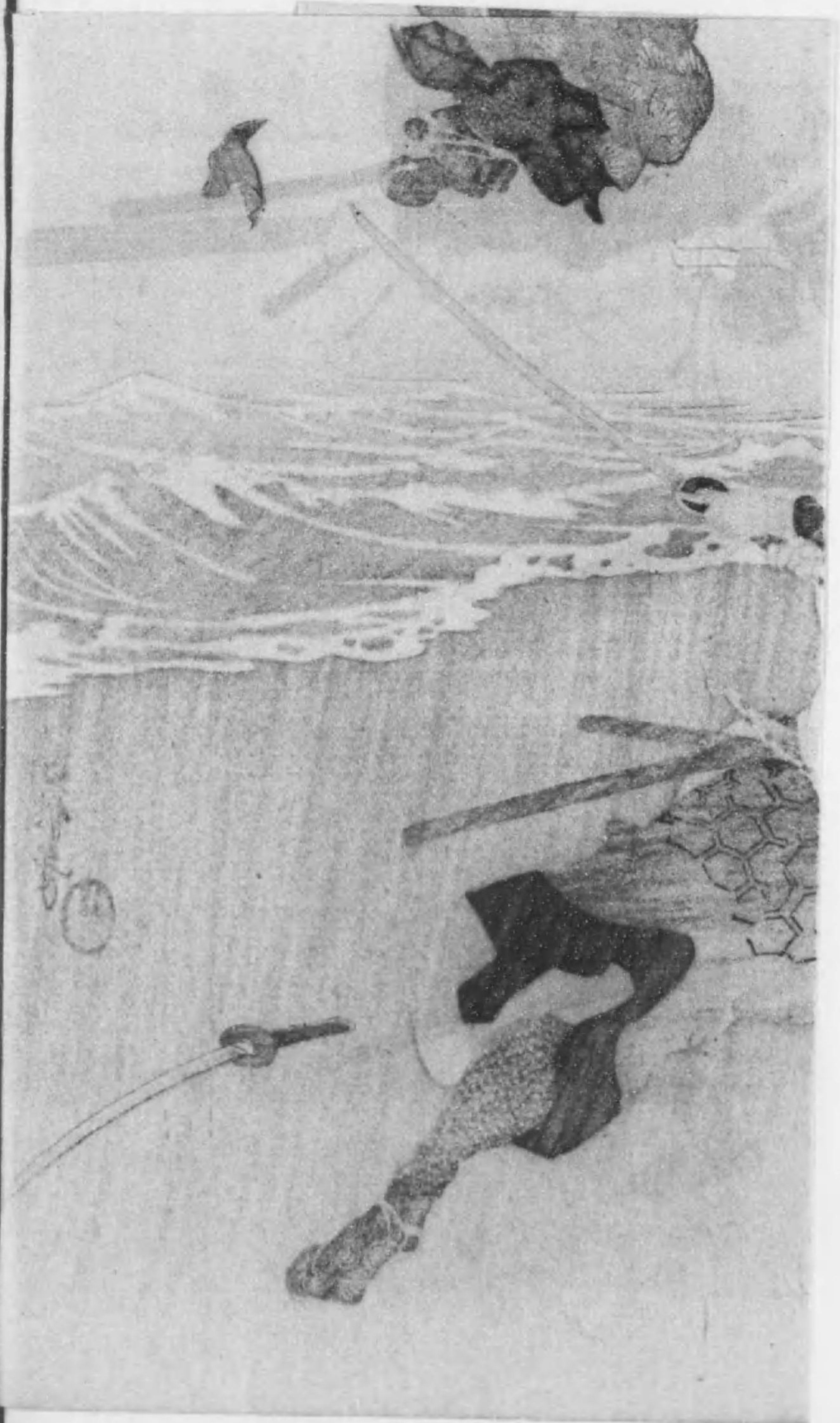
豊前島大仇討

豊前島大仇討

第一回

四代目 石川 一口 講演  
丸山平次郎 速記  
中村卯吉 復文

本日より開講いたします。豊前島大仇討の話は、先般宮本武蔵と表題を下しまして話を致しました。その後編でございます。をば授かり、これより師の仇を報いんとて、すでに京都を立つことにならなりました。そこで有馬喜兵衛にむかひ縁あらば後日再會をせんと、懇ろに暇を告げます。有馬も誠に名残を惜み、手前宮本先生の片腕にもなれる程の者なら、子供も申上げたけれど、









私の宅へお出で下さいまし、武蔵「イヤ〜」お前の世話になるのも何うも済まぬから、近傍に旅館があれば、何うか案内をして貰ひたい、そこで道頓堀の大坂屋といふ旅館へ案内を致しました、宮本も懐裡が澤山にあり餘ったといふでもございませぬ、漸く三兩の金が便りでごさいますから、なか〜、悠々として居られませんでござりませぬか、武蔵「オ、小島屋三右衛門殿か三右へエ、何うでござりませぬか、武蔵「イヤ、手前も悠々として居られぬ、昨今暮らしたくない、武蔵「イヤ、早く出立をしたと思つて居る、三右「名も彼方此方と荒増したから、貴郎をば無理にお引止め申し、實に私も申譯がござりませぬ、お厭ひはござりませぬといふ旅先といふものは、貴郎のやうな先生方は、怖い恐ろしいといふやうな事はござりませぬ、約まり失禮でござりますすが、お前は面理の都合が一番御心配でござりませう、武蔵「イヤなか〜、お前は面

白い仁ぢや、實言うて呉れる通り、マア武術なぞといふものは、それからそれへと上のあるものゆゑ、決して強い事は言へぬけれども、マア〜、然のみ怖いといふ程の者もないが、實以て懐裡が一番怖いぢや、三右「左様々々、然うであらうと私も察します、こころで一ツ金儲がありませぬが、あやりなすつたら如何でござります、武蔵「ハ、ア如何いふ金儲だ、道中で多くの困難をして来たが、金儲の都合といふは、三右「實はこの島之内に大藏院宮内といふ劍客者が居りました、いま一軒今出川内藏助といふもの、この二人は大坂界限の總ての劍客者を集めて二十四軒の道場を取締をして居ります、武蔵「成程、それが何うしたといふのだ、三右「ところで近頃は賭勝負といふものを致します、賭劍術とか申して、大層流行して居ります、私も貴郎をお見受け申せば、天晴れの老先生と見ますから、一ツお出でなすつて、賭勝負をして打倒して金儲をなすつたら如



何でござります 武藏成程、イヤそれは面白い、併し拙者は多分の  
持合金もない、どころが勝つ勝たぬはさて措いて、最初に金を見  
ぬことには、その賭には乗るまい 三右へエ、そりやア左様でござ  
ります 武藏それに忽ち困るではないか 三右そりやア宜しうござり  
ます、如何な工面をしまして、私が持つてお供を致します 武藏  
ム、ウ、イヤ面白い事が流行して居る、ぢやア三右衛門殿、一ツ件  
れて行つて下さるか 三右へエ、その替り先生、歩割は私にも下  
さいますか 武藏そりや言ふまでないことぢや 三右そんなら参りま  
せう、明日お供を致しますから」とそこで翌日三右衛門は金の工  
面をして旅宿へ宮本を迎ひに参りました 三右先生、それでは只今  
よりお供を致しませう 武藏ム、行かう」とその儘身装も振も構は  
ず汚れた衣物を着て、武藏はノソリくと三右衛門の案内に連れ  
て、島之内大蔵院方へ出掛けて参りました、すると三右衛門は、  
「先生、御免下さいませし 宮内ア、何用ぢや 三右この先生は武藏修

行の爲めに大阪へ見まらされた方で、私は道頓堀の小島屋三右  
衛門と申します者、手前方を便つて参られた先生でござります  
が、何うか一本お相手をお願いします 宮内ア、左様か、するどこの  
方は何かナ手前の方へ向けて例の勝負を承知で参つたのか 三右へ  
エ、そりやア最う私は何分今出川先生に大蔵院先生といへば、  
最う大阪名代の剣客者の御取締ゆゑ、豫てこの先生にも話をして  
参りました 宮内左様か、御貴殿手前の事を聞きます 出で  
なすつたのか 武藏ハイ左様でござります、萬事は三右衛門殿に聞き  
及びました 宮内成程、妙な事が近頃流行いたして、何程か金子を  
賭けて、武藏の勝負を試みるどいふと、心ある者は何か可怪しい  
やうにも思ふかなれど、それが近頃は流行で、追々にこの大阪へ  
諸方から武藏家が寄つて来て、賭勝負をば致すやうなことを、其許  
は何と仰せられる方でござるか 武藏手前は赤松武藏と申します  
者で、三右衛門も豫て船中で宮本といふ名前を聞いて居りました











ツても可いではないか三右厚皮しくも何もありません、  
對通り貫うて歸りませう、それとも最う一本更めてやりな  
なら、今回は三十兩出しますから、貴郎の方から六十兩出  
すつて、九十兩で一ツ行きませうか宮内イヤ今日はこれ最  
い三右左様ならこれで歸ります先生御苦勞さま、何うも結  
ざります、左様なら大きに武藏は莞爾笑ひながら武藏先生  
下され宮内これはよくようこそ出で下された、誠に今日  
が不快で困つてゐたところ武藏然らば兩三日のうちに直  
りませう宮内イヤ最うも出でなくとも宜しい、誠に御愛  
りませなんだ武藏御免下されと笑ひながら武藏は三右衛  
と諸共に戶外へ出ますと三右先生武藏何ぢや三右この足  
序でに今出川内藏助の道場へ参りませう武藏サア、明日  
やうではないか三右へ貴郎大藏院宮内をば如彼して、打  
置きなされると、直に手紙を以て知らせますから、そんな  
事があつ

ては、最う後は金になりませんから、この足で今日の  
ッチャと片付けて了ふ方が宜しうござります武藏三右衛  
層厚皮しう出掛けたナ三右エ、錢儲は早い方が宜しい、私  
裡に金は餘程工面をして持つて来て居ますけれど、然う  
ら奮込むのも如何だと思ひまして、詰り十兩を損する  
といふ事を見ましたので最う貴郎の腕前を拜見いたしま  
からは大丈夫、これから今出川内藏助の方へ急ぎませう  
左様か、それでは参らうとそこで勢ひよく出て参りませ  
關にかゝり案内を乞ひますと、内藏助は自から立出てま  
内藏ドレ、誰方三右エ、道頓堀小島屋三右衛門といふ者  
います内藏何しに参つた三右こりやア手前方に参られ  
生でござりますか此方へ上れ三右ア先生、此方へ上りな  
し武藏御免下され内藏これは武藏東國産れの未熟者に致



赤松武藏と申す者でござる内蔵左様か、手前は今出川内蔵助といへる者でござる、して貴郎は賭勝負を御存じで出でになりましたか、武蔵左様でござります、これなる周旋人の三右衛門からその託を承りまして内蔵ア、成程前が周旋をしたのがナ三右へエ左様でござります、内蔵して賭勝負は何程賭ける胸算だ、三右鬼に角一ツ五十兩だけ出しませう、内蔵ム、ウ、少と大きいナ三右イエそりやア最う私に奮込んで、もう損をするなら、私も見込んだ先生でござりますから、宜しうござります、奉納します、内蔵、成程前は賭が好いと見える、三右へエ、私も、貴郎の一羽も商やア、指の先ほどは小島で以て、都合に依ります、貴郎五十兩や百兩儲かることは始終でござります、ナアニそんな事位は構ひません、内蔵、な、か、好い丁簡だ、三右エ、最う貴郎商人ツて者ア、その位は度胸でなければ、いやアいけません、考へて御覽なさいまし、三右も五百兩もかけた、驚が一夜のうちに死んで仕舞ッたら、一も取らず

二も取らずで内蔵ア、アそりやア然う言へばそんなものだ、それではチ、支度をしてやッて見やう、と百兩の金を出し都合百五十兩を三方に載せ、片傍の神棚へ供へました、これ、これに限る、と獨り三右衛門は喜びながら、「コウツと待てよ、前が二十兩還回が百兩都合百二十兩、それから後は皆下手な奴だから、彼奴等の所では大きなことは行くまいが、マア今日の日暮までの儲けが五十や六十にやアこれもなるだらう、マア何程先生が客な仁て、一割五分位は乃公に呉れなさいやア、金の利もか、ツて居ることだ、併し銭儲だ、こりやアこの先生を伴れて、中國から九州をグルリと賭勝負をして廻ッて来たなら、最う驚のやうな物を探して苦勞をして儲けるより、餘程確かだわい」と三右衛門は懐裡十露盤ばかりを持ッて居ります、然るに今すでに勝負にならうとして居るところへ、遠しく門人が兩三名出掛けて参りまして、「先生、今日は」と言ふ聲に、宮本もヒョイツと背後へ退きます、



今出川内蔵助も背後へ退きまして内蔵「オ、門人衆か門人先生、チ  
ヨツと勝負を待ちなすつて内蔵「何ぢや、門人「エ、チヨツと貴郎  
に是非話申さんければならぬ事が出来て参りました内蔵「如何い  
ふ事は知らぬけれども、此處で話したら可からう門人「エ、チ  
ヨイと取を拜借いたしたい事がござります内蔵「然うか、客も  
あることゆゑ、この場て話せば可いに門人「この場てはチヨツと話  
し悪い事でござりまして、三右衛門は「可怪な話になつて来たが  
こりやア大藏院宮内の方から、詰らない事を言つて来たな、錢儲  
が無茶苦茶になつて仕舞ふ」と案じて、只神棚にばかり目を着け  
て居ります、そのうちに三右衛門はソロソロ尻を持ち上げて神棚  
の前に坐り直して、いよ／＼三方を下さうとか、つたら一ツ談判  
をせにやならぬと、その用意を致して居ります、今出川は「赤  
松氏、チヨツと御免下され武蔵「サア、御遠慮なく」そこで道場  
の障子を開けて次の間へ這入り内蔵「各は何しに参られた門人「先生

彼れは赤松武蔵といひませうが、内蔵「然うぢや門人「いけませんぜ  
幾ら賭けなすつた内蔵「小島屋三右衛門といふ者が連立つて来て  
五十兩出した門人「イヤ彼の老爺、なか／＼敏捷い奴で、彼の道頓  
堀の小島屋め、今朝大藏院宮内先生が強く脇腹を打かれて、二十  
兩打撃られ今チヨツと用事がござりまして立寄りましたら、未だ  
に痛ひと云つてウソ／＼陰いて寝て居られました、二十兩金を打撃  
られて病人にされ、それでこの儘死んだら、道頓堀小島屋を崇殺  
さばやアならぬと宮内先生背くなつて居ります、内蔵「ア、貴公方  
は知らして呉れるのが悪いぢやないか、最う此方は百兩賭けて仕  
舞つた門人「百兩、そりやアいけません、そんな事をして如何なり  
ます、貴郎金の百兩も出しなすつて病人にされて内蔵「けれども  
今更小便は出来ぬ門人「小便も糞もありやアしません、何とが其處  
のことは程よく言つてお断りなすつたら如何でございます内蔵「然  
うはいかぬ、まらゝい事になつて来た、して強いのか門人「強いの強



くもないも話にはなりません、何しろ一本で以て大藏院宮内先生は病人にされた位、貴郎は本来大藏院先生から見ると、少しくも弱い方だから、事に依ると百兩は反対に香奠で打殺されて仕舞ふかも知れませんが、内藏、ム、ウ、イヤ、小島屋の老爺め、えらい者を伴れて来やがったと、戦々今出川も慄出し、そこで再び道場へ出まして内藏、誠に何うも赤松氏、お氣の毒でござるが、手紙をクシク時ならず腹の痛むのが持病でござる、何うもまたシク、痛出して参りましたから、今日はお見合せを願ひたうござります、武蔵、それは己むを得ません、人間は何うも四百四病の器とやら、御病氣とあれば致方がない、例で三右衛門なかく、そんな事は聞いて居りません、三右先生、そんな馬鹿々々しい事を言つて貰ひますと此三右衛門は困ります、今出川先生、貴郎もそんな卑怯な事を言つて貰ひますと困ります、ア貴郎は腹が痛ければ痛いで三割とか五割とか引去つて、諸金としてその賭けたのを、出しなすては

如何です今の今、で得心してお出でなすつて、門人衆が出て来てから小便するど云のは卑怯でござります、内藏、コレ小島屋、貴様は商賣をして居るやうなことを言ふ、三右、エ、私は商賣の胸算で来て居ります、知れた事を貴郎仰しやいまし、小島屋が商賣を休んで賭勝負の金を工面をして来て居ますのに、利口錢にならね話にかゝつて堪りますものか、内藏、けれども何うも甚だ迷惑だ、三右、何うも迷惑も何もありません、先生、これが何ぞ貴郎の宅へ書でも書いて下さいとか、また書でも書いて下さいとか言つて頼みに来たなら、筆を執らうと思ふけれども、俄かに腹が痛出したから、思ふやうにかけぬと言ひなされるのなら、そりやア無理はござりません、假りに剣客者ぢやアござりませぬか、これが卑竟何にも意趣も遺恨もない同士がやるのだから宜しいが、倘しや貴郎に遺恨があつて、命の取遣をせにやならぬといふ場合に、なつて、得心はしたもので、腹が痛うて堪へられぬに依つて待つて呉れといふやう



な事を云つて先方が承知をしますか内蔵イヤそれと何でも彼でもやつて貰はに  
が違ふ三右イヤ、エ事柄は違ひません、何でも彼でもやつて貰はに  
やなりませせん内蔵イヤ最う言はれて見ると致方がない、實の所は  
耻辱を言はねば理が聞えぬが、雨替屋から促られて居る事がある  
それで雨替屋へ金を渡さにならぬゆゑ、百兩の金は今日出し悪  
い事が出来て最たのだから、最う少し金を減じて貰はにやならぬ  
三右そんな馬鹿氣た事がありますものか、卑怯な未練な武藏コリヤ  
三右衛門、然う貴様のやうに手強う言ふてはいかぬ、貸した  
ものを催促に来たやうに三右赤松先生、こりや貴郎が他から口を  
あ出しなさる所ではござりませせん、貴郎は控へて居て下さい、私  
は一生懸命の掛合でござりますから、武藏も腹の中では可笑いや  
らまた先方には氣の毒やらで堪りませせんが、小鳥屋もなか、一  
生懸命でござります内蔵何と言ふて呉れても三右衛門、此方も迷  
惑とするから三右そんななら私の方で二十兩だけ遠慮をさせう、

貴郎の方で六十兩を出しなさい、此方から三十兩看す、儲かる  
金を引去らにやならぬと思ふと、残念だけれども仕方がござりま  
せん、そこで溢々泣面をして、今出川内蔵助は六十兩に致し、此  
方は三十兩、都合九十兩の金を三方に載せて、又候神棚へ供へま  
した、妙なもので、人間は神経でござります、最初の間は百兩で  
も出す位いだから、ナニ猪牙才などいふ了簡でござりましたが、  
己れより一枚方上の大藏院宮内が投げられて、病うて居るの寝て  
居るといふ事を聞きませすと、何となく恐怖ぢ、聞怖ぢ氣色が悪う  
ございます、最う六十兩は痛い目をして取られるかと思ふと馬鹿  
々々しいまた門人に看す、先生は彼の六十兩を取られるかと、  
障子の蔭より隙見を致して居ります、うちに此方は再び道場に  
て立上り内蔵卒さ赤松氏武藏「御免」とあつて、武藏は例の二刀流  
の極意で以て、陰陽の構へをつけますと、門人は障子の此方に  
て「これ、これ、これで以て大藏院先生は腰骨を打たれたんだ、今に



當先生もまたいかれるかも知れぬ」と噂をして居りますのが、取  
に這入れば這入るはど、今出川も気が悪くなつて来て、何となく  
打殺されるやうな心持がして、ヤツと一騒動共に、打込む木刀  
矢と受止め、同じく右に持つたる木刀にて曳と打込みますと、  
門人は障子の外から「チア此處だ」と聲をかけた、小島屋三右衛  
門は直に障子の三方の金を打ちあけて懐裡に入れ三右衛門先生、  
直して内蔵「コレ小島屋、汝れチヨツと待て三右衛門も我もあるも  
のか、今出川も成程門人等の言ふ如く、打たれた痛みで急に起つこ  
とが出来ません、小島屋は戸外へ出まして三右衛門でござります  
先生、好い金儲でござります、武藏三右衛門、貴様は餘程をらい  
奴だ、三藏金儲はこれ位の早い事を喫はさばや何うもなりません、

如何でござります、これから後はボチ／＼三兩五兩ぐらゐの儲け  
ばかりりませうか、武藏「イヤ最う止めて呉れ、可憐さうてはないか  
三右衛門先生、金儲が可憐さうの氣の毒が要つた事ではござりませ  
今日の間は少なうても五十と七十の金と上げやうと思ひました、  
現物今出川めが手書指しやアがアがア起して四十兩引込み、  
最う先生は腹だといふし何うも、仕方がない、最う歸りませう」  
そこで旅宿へ戻りますと三右衛門先生、この金を武藏此方は何うで  
も可い、こんなものを跡に多分に儲けやうと思つたのでも何でも  
ないが、貴様が行きたいと言ふたから、マア此方は支度のため  
出て行つたのだ、三右衛門してこりやア如何いん事にしませう、武藏何う  
なと貴様の都合の好いやうにしろ、三右衛門大體ですと何でござります  
七三といふ所でござります、四分六にでもして貰ひませうか、  
何の事はない、郎の割ではあるまいし、小島屋三右衛門はなか／＼



校い奴でございませす 武藏其處は何うなど好いやうに致せ 三右それ  
では先づ最初が二十兩、後が六十兩、都合八十兩、四六にして六  
八四十八兩、四八三十二兩、すると貴郎へ四十八兩差上げます、  
武藏「ア、然うか、三右何卒最う四五十日貴郎逗留をなすつてお呉  
んなすつたら如何でござりますす 武藏最う然うも用はないので三右  
貴郎は用はござりますすまいが、私はこれから一ッ草鞋掛けで以て  
今夜夜通しにても河内から和泉の方を探して、手紙を渡さぬとこ  
ろの劍客者を尋ね参りますから 武藏「イヤ止して呉れ、そんな事は  
最うせぬ、貴様は慈な奴だ 三右「錢儲つてもなア出来るうちにバタ  
／＼として置きませんと、後は出来ぬものでござりますすから 武藏「  
イヤ明日は當地を出立と致さう 三右「左様でござりますすか、残念な  
事とござりますすねえ、看す／＼金の儲かるのに、大阪を見捨て、  
お立ちなさらうとは、ア慈のない先生でござりますすな 武藏「ハ、ハ、  
貴様とは違ふわい 三右「ちやア明日お立ちでござりますすか、

武藏「明日は立つとしやう 三右「何處へお出向けてござりますす 武藏「何  
處と別に當もないが先づ中國から九州を修行をしやうと思ふ、縁  
があつたらまた會はう 三右「左様でござりますすか、お名残惜しうご  
ざりますす 武藏「名残が惜しいのではなからう、錢儲が惜しいのだら  
う 三右「先生、貴郎もなか／＼言ひたい事を仰しやいますな 武藏「ハ  
、ハ、ハ、武藏は笑ひながら、應てその夜は當宿元に泊り翌朝に  
至り、大阪を背後になし、これより中國筋へ赴かんと圖らすも作  
州津山へ参り、三天狗の出會といふ話でござりますす。  
第 二 回  
さて武藏は大阪を出立に及びまして、彼方此方ど名所古跡を見な  
がら、いつしか播州路へかゝりました、この足で三備地方へか  
いらうとは思ひ交した、「イヤ待て暫し、一應因伯の方へ遣入つ  
て見やうと、作州津山の方角へ取つて参りました、豫て己れは亡



父よりの話にて、吾れは五岳山新清水の觀音の申子として出来たと  
いふ事を聞いて居ります、そこでこれへ向けて參詣をしたいた存  
じ、五岳山新清水の觀音へ御參詣を致しました、途中の立石を見  
ますると、これより作州津山道と記してありますから、然らば津  
山に一ツ立起えて見やうと、片傍の茶店に腰を打掛け、一服いた  
して居りますと一人の商人がドシ／＼と荷物を擔いでやつて參  
りました、男ヤレ／＼、疲弊た／＼、老翁どん、チヨイと何でも可い  
から早瀬で酒を一本下さらぬか老翁、ハイ、承知いたしました、何  
ぞ撥へませうかナ、男、イヤ撥へて貰ひたいのは腹一杯ぢやが、聞  
誤突いて居ると戻りが危ない老翁、ハ、ア、例の一件かな、男、ム、  
／＼、然うぢや、エト旦那、貴郎は何方へ出でござります、武蔵、此  
方は未だ何方といふ方角も付かぬが、津山の方へでも一ツ行つて  
見やうと思ふのぢや、男、ヘエ、左様でござりますか、私も津山へ  
参る者でござります、武蔵、ム、ウ、いま茶店の老翁が何ぢや一件の口

といふやうな事を申して居つたが、如何いふ事ぢや、男、エ、それ  
は旦那、實はこの頃津山は用心が悪うござりました、私は津山  
の旅商ひをする者で、始終大阪へ通つて居ります、盗人ど云  
でもないやうでござります、武蔵、ハ、ア、男、只もう人と見たらズハ  
／＼、試斬りに致しまして、そこで最う何人とも殺されまして、  
武蔵、ハ、ア、男、それゆゑ氣味悪がつて津山街道の入口にかゝつて  
來ましたら、皆怖い者に觸るやうに、早く旅宿を取ることにな  
ります、それで最う津山の町の者でも、日暮方になりましたら、恐  
ろしがつて成るだけ戸外へ出ないやうに致します、武蔵、ハ、ア、左様  
か、それは何うも都合な事ぢや、この向ふに見える處は、彼れ  
は何といふ、男、エ、これから向ふは勝間田といふ處へ出て行くん  
でござります、武蔵、ア、然らばア、鬼も角も捕者同進しやう、男、エ  
、有難うござります、ア、私も今夜は旦那のお供をさして戴きま  
したら安心でござります、武蔵、ア、／＼、氣遣はないわい、男、ヘ、エ、



イヤ有難うござります」そこで連立ッてこの茶店を立出でました  
が男老爺さん、お邪魔であつたナ老爺大きに有難うござります  
マア併し旦那今晩その旦那様と同道なすつたら、チヨツと位の日  
が暮れましても氣遣はござりません男乃公もマアこれで安心ぢ  
や」と纏て二人は話を致しながら出掛けて参ります武蔵時に商  
人やこの頃は津山の主公は五國かエ男へ主公は五國でござり  
ます武蔵「これから津山へは男「これから向ふの勝間田といふ處ま  
で三里ござります武蔵「ア、左様か日暮までには津山へ這入れるで  
あらう男へエ、そりやア最う確かに這入れます武蔵「その試斬り  
といふのは、男「その城下の入口の二枚橋といふ處へ出まするので  
武蔵「ハ、ア、何者ぢや、男へエ何でも天狗ぢやといふ噂でござり  
ます武蔵「ム、ウ天狗か、そりやア何うも不思議な事ぢや、然らば  
その天狗を二三羽生捕ッてやらんければならぬ男且那、御元談  
な事を仰しやいまし、なか／＼この天狗は手にも足にも合はぬも

ので、津山の御藩方も自慢で出なさる方もござりまするが、誰れ  
も彼れも皆奇付かれないで、騒動ばかりをして居られまするが、  
左様か」と言ひながら、向も道を進んで参ります、さてこの  
三天狗といふは、津山の家中にして、名古屋、塙、高木といふ三  
人でござります、少々腕の出来るところから、動も致すと、實地  
に當ッて見れば、人間的にいふものは、剣術が何れ位の出たか  
と、ろが、それは細水練の物の用に足りぬもので、不惑の  
やうなれど、人を試して見んことには、眞個の事は分らぬといふ  
詰り己の勝手口の實をつけ、斯かる殘酷なる事をやッて居るの  
ございます、これが大評判となり、人呼んで天狗々々といふや  
な事をば言囃しませる、尤も作州津山のうちでは、若手の中  
達人でござります、前にお話申しました通り、自然ど人が恐  
怖れるやうなことで、次第に城下も淋しくなり、下知になつて、  
外が津山領主は御心配あそばし、家中の若に下知になつて、夜



れ役人夜廻りを致しませぬ、すると三人は顔を知られては面倒だ  
と、夜廻りの時は一人も出ません、そこで夜廻りの役人より、御  
上へこの趣を申し上げますと、出ぬとあつて見れば仕方がないか  
ら、捨て置けとの事でござります、尤も三人は八島流の居合に妙  
を得て居ります、彼の三丁、鼻、矢、新などいふ事をよく申しま  
するが、何うもこれ等は我々講談師も毎々申し上げますが、一  
口は信じて難い話のやうに思ひます、一旦斬つた者が鼻、舌、ひなが  
三丁、向ふへ歩いて行つて、何か物に突當つて、鼻二ツに割れると  
いふ、そんな事のあるべきものでなからうと思ひます、マアこの  
居合の法ては、矢、新などいふ事は、えらい喧しい藝ださうに  
ござります、時にこの頃、南紀州に於て、人も知つたる熊道の遠  
人、關口、彌太郎といへるは、有名な仁徳でございりますが、折節この  
津山へ参ります、彌太郎のうちは一人、名古居山三郎方へ返節して  
居ります、また山三郎も關口の先生、武藝は、世に名高いことゆゑ

我々匠と稱んで、朝夕稽古を致して居ります、この事を主公は  
早くも御聞きに相成り、關口をば御前近く御召遣はして、種々お  
話などを致されませぬ、また關口は紀州にあつて居なくも三家紀  
伊庭の御目通も度々した仁ゆゑ諸侯方へ出ましても、別に恐れも  
何も致しませぬ、尤も他の扶持をも蒙かうといふ腹のない仁でござ  
います、すから、今日しも津山の御前に出で、御酒を頂戴いたし  
ながら、お話を致して居ります、時に主公の傍せられませぬ、  
一談に彌太郎、予もこの頃心痛を致して居る、夜々城下の二枚橋  
とかへ、天狗が出で、人を害するなせといふことであるが、左様  
な事のあらう道理は素よりなからうと思ふ、何か家中の者が試斬  
りでも致しをるであらうと、予は心得るが、如何であらう彌太郎、ハ  
ッ、御意にござります、手前もその事を深く心痛いたし、幸ひ  
主君の御城下に彌太郎、足を止め居りながら、城下の人に迷惑をさ  
せ御城下、哀れと相成るを見ながらに致して、彌太郎捨て置く譯で



はござりませぬ、篤と實地を見定めて、以後の懲戒、限りなく戒めてやらうと心得て居ります。主公、何分にも好きに願ひぞ彌本、其方の腕なれば、如何なる者も恐るゝに足らず、何分願ひぞ、是にて關口は御暇を告げ下城を致して、名古屋への屋敷へ戻りました彌本、只今山三、此は先生と歸り、して御前より何か御用でもござりましたのか彌本、イヤ別に用といふでもないが、今も今どて上に於てお話しもありしが城下の二枚橋にて夜々天狗が出で、無暗に人を殺めるといふことで、御上に於ても非常にこの事を心配して御在で遊ばし、彌太郎も上から仰付けられた事もあり、近日のうちに引捕へ、その天狗めをば引裂いてやらねばならぬ、山三郎、御貴殿などは今若手で些か武術の出来るところより、それ等をば鼻にかけ、儗しや貴殿等の所爲ではあるまいかと思はるゝ、山三、イヤ中々左様な事は……彌本、サア其許等ではあるまいかなれ

ど、何うも吾等が目を着けるところでは、家中の若武士の所爲としか思はれぬ何にも致せ疑はしきことであるから、夜分他行は御無用な事でござるぞ山三、イヤ委細承知を致しましてござります、是にて山三郎はチョツと出られぬやうになつて参りまして、困つた事であると思つて居ります、然るに境、高木の兩名は、その後相變らず試斬りに出て居りますから、羨ましいことである手前、關口先生が目を着けて居られるから、迂漏出る事は出来ぬア、行きたいナやりたいなどは思ひますもの、何うも致方なく、空しく柄に手をかけては我慢を致して居ります、時にその後上の御用を濟ませ下城を致して我屋敷に立戻りました山三郎、家の來の兵助といへるを呼びまして山三、兵助、關口先生はお見えなさらぬが、何處へお出になつた兵助へ、今日もまたチョツと貴郎と入違ひに、御上から招きになりまして、上へ出られましてござります、山三、ア然うか、それは幸ひぢや、先生はまた御酒を



頂戴すると、喜んで出になつたであらう兵助へエなか、ブツ  
も可い、先生が在なは没計の幸ひ今晚こそ出で行つて、一ツ  
二人の者に後れぬやうにやつて呉れん」と思ひましたから山三  
リヤ兵助、兵助へエ、「今晚は此方チヨツと用向あつて今から出るが  
運うなるかも知れぬから、鎖りを好くして呉れよ兵助旦那様、如  
何な御用かは存じませんが、この間私には庭の掃除をして居て承  
りました、が、關口先生は貴郎に御異見をなすつて、幸下の冠瓜田  
の靴、貴郎などは今も若手で津山御藩のうちにても、腕が出来ると  
いふ評判のある方ゆゑ、他の者が人を殺めても、これは名古屋  
ではないか高木ではないか塙ではあるまいかどいふ事を申しませ  
ゆゑ、成るべく夜分は出ぬ方が宜しうござりませう山三イヤ  
何を申すか、貴様等の知つた事ではない、確かりと留守を致せ」

と言ひ置いた儘、大小刀を佩んだるまい、早々山三郎は屋敷を立  
出でました、お話替りまして關口は御前へ出まして、いつもなが  
の御酒の相手、四方八方の話をして居りますうちに、俄かに  
主君は御腹痛となりました、「ソレ御前が腹痛である」と直に手醫  
者を呼んで、薬などの都合をさせました、併しこの主君は日頃御  
壯健な質でございますから、暫時の間見合はせまするうちに、  
餘程御痛みも治して來ましたから、主君彌太郎、今日は誠に不都合  
であつた、彌太郎何う仕りましたか、主君彌太郎、折角招いたのに、  
なかつた、許して呉りやれ彌太郎何を仰せられませう、先刻より彌  
太郎、何となう胸騒ぎの致します事もござりませう、遠慮な  
今宵は御免を蒙り、彌太郎め御暇を戴きます、主君、  
く引取つて呉れ、是にその儘彌太郎は下城を致し、屋敷に戻りま  
す、と、表門が鎖めてございませうから、兵助イヤ先生でござりませ  
門内より兵助誰方彌太郎、關口ちや兵助イヤ先生でござりませうか











かゝりました、右の武士引外したる圓端の表裏、腕首掴んで二枚  
橋より川中へ臨んでドシトリ投込みました「惜き舉動、卒で朋輩  
の敵、覺悟せよ」と高木、名古屋は飛びかゝって斬込むを、引外  
したる件の武士、「此は狼籍なり曲者め、猪牙才な事を致すか」と  
言ふより早く手に持ったる鯨骨の軍扇にて、發矢とばかりに名古  
屋の願を打ちますれば、眠眩んで控と倒れ、同じく高木が向つて  
來るを、肩口發矢と打ちなぐれば、これまた腕が麻痺るばかり、  
迎も叶はぬと思ひけん、背後をも見ずして逃出す二人、塙も川  
よりやう／＼に上りました、月の光明で様子を見れば、名古屋、  
高木の兩名は、雲を霞ど向ふの方へ逃行く有様、塙も迎も叶はぬ  
と思ひましたから、同じく濡鼠となつて、二人の跡を慕ひ、一生  
懸命に逃しました、二丁逃げて参りますと、片傍の森に紙  
帳を吊りて寝て居る者がござります、山三卒爾ながら願ひ申す  
紙帳の裡に聲あつて、〇何事でござる、山三御免下され」と周章し

く紙帳の裡へ三人は飛込みました、〇此は狼籍なり、此方の返答  
も碌々聞かぬそのうちに、我寢所に飛込むとは不埒なり」と言ふ  
より早く、足を以て高木をハツと蹴飛ばし、名古屋と塙の襟袖を  
掴み、起上りさまにドンとばかりに投着けました「今夜は如何な  
る悪夜ぞ、出會つた者々々に打着けられたり投げられたり、命は  
かりは助け下され、只今狼籍者に、出遣ひ勝敗は仕つたれど、な  
か／＼容易ならざる手並の者に、思ふに任せず、殘念ながら逃  
げて参りました、格別の憐愍を以ちまして、暫時の間、隠匿ひ下  
されたいた、〇左様ござらば隠匿ぬでもないが、只御免とのみ聲を  
かけながら、他の寢所の裡へ這入るとは甚だ不都合、依つて悉く  
投出しは致したなれど、隠匿ひ呉れよとあるなれば、武門の情け、  
如何にも隠匿して進ぜるから、其處に控へて居れば、山三今に此處へ追  
合紙帳の裡とは、取れませんから、其處に控へて居れば、山三今に此處へ追  
合紙帳の裡とは、取れませんから、其處に控へて居れば、山三今に此處へ追



深して心配をするに及ばぬ、我々がたされ三人、早くも死の武  
士は誰を遣つて参りませしが、それを見るなり大番あげ武士、ヤア  
それなる紙帳の裡へ只今参込んだる三人の血者、此處へ出でよ、  
紙帳の裡の方、隠匿ひあるは不都合なり、其奴等は眞摯者でこ  
ざる、お出しなされるか但しはあしなさらぬか、強つて出さぬと  
あるなれば、手前自分から引出しませうか、三人は手を合はせたり  
で「慈悲でござるお情けでござる、何卒お助け下され」と戦々然  
つて居ります。○その儀は必らず心配いたすことではない、ヤア  
帳たりども撫者の城、跡ひなら踏込んで見候へ、見事踏込み候  
がござるか、撫者を武士と見込んで及ばぬ、本で紙帳を、と手  
匠ひ申す武士、左様候せあらば是非に及ばぬ、本で紙帳を、と手  
延して引外しにかゝらうとすれば、中より飛出したる一人の武士  
「此は狼籍なり、この紙帳に手をかけんとするは不埒の至り、覺

悟を致せ」と此方も然物、身擦へなし追掛け來つた武士を目掛け  
一刀、メラブと抜放し、斬つてかゝるを心得たりと、引外したる右  
の武士、同じく抜連れ丁々發矢、雷光石火劍の稲妻、火花を散ら  
して戦ふ腕並、何れ劣らぬ達人同士、何方が勝つとも負けるとも  
甲乙なしに戦ひ居ります、その危なきこと譬ふるに物なく、こ  
の時、田中明神の拜殿のうちより彌太、双方ともに相待ち召され、只  
今此處へ出で、此方御仲裁を申上げる、暫く待つた兩人、ヤアその  
儀は何人でござる彌太、撫者は紀州の浪人、關口彌太郎、御兩所に申  
す事あり、必らず逸急て粗相を召さるナ、ナニ關口先生とや彌太先  
づ双方暫くくく」と手拭取つた彌太郎は、徐々其處へ出掛けて  
参り、眞劍の中へ御つて入り、大手をひろげて引止めましたが、  
さてこの紙帳の中、主人、將た相手の武士は何者でございませう  
か、次回に委しく伺ひませう。

X  
X  
X  
X  
X  
X



第三回

エー前回は伺ひましたる兩人は、一名は別人ならず宮本武蔵でござります、いま一名の紙帳の裡に居りましたるは、京都名代の吉岡又三郎兼房といふ者でござります、武蔵「關口先生、御貴殿斯様な所へ如何して出でなされたのか、彌太イヤ日外や其許に東海道箱根の山中にて出逢ひ申し、その後未だ紀伊國へも立歸らず、處々方々と流浪て、遂に只今は作州に足を留め居るやうなことで、不日手前も本國へ立歸るの心底、して其許は今まで何處にも出でありしか、武蔵「御意にござります、手前は御貴公様に箱根に於て別れ申し、その後伊東彌五郎先生の許を訪れ修行の後、京都に暫く滞在いたし、遂に當地へ参りましたやうなことでござります、彌太ム、ウ、ウ、して其許これよりは、武蔵「然ればでござります、中國筋を九州へ赴くの心底、彌太ム、ウ、ウ、その九州へ走かるゝは、修

でござるかな、將たまた如何なる御用にて、武蔵「これは色々仔細のあることにて、彌太イヤ左もあらん、強して尋ね申すも異なご、吉岡兼房はこの談を聞き、又三「さては噂に聞きし石川群東齋が御門下のうちにて、世にも名高い宮本氏とは其許でござつたか、知らぬ事とは言ひながら、以外の失禮、何卒御容赦下されたし、畢竟手前もこの中當處の二枚橋に於て、夜々怪しの者出づると聞き及び、實のところは實地を見届け退治呉れんと存じて参つたやうな事でござる、して關口先生には、また何ゆゑに斯様なところへ、彌太「然ればでござる、其許等と同じこと、實はその天狗一ツ捕へて呉れんと存じて参つたるところ、大抵吾れ等が察しに違はず、天狗のうち一人手前の親しい天狗が居ります、紙帳の裡より出し下され、これを聞いて三人は戦々慄へて居ります、又三「いつまで隠して居たところが無益、斯う顯れた上からは、如何にも天狗を引出しませう」と是にて、武蔵は三名の天狗を紙帳の裡から追出し



した、又三何れも鞍馬山の太僧正はこれ等でごさります。この時、  
開口は、彌太、山三郎、この開口が異見を致したのは、此處の  
事である、如何だ、今晩宮本氏に各々打着けられたり打たれた  
り少し天狗の鼻が折れたであらう山三誠、先生、何とも申しやう  
がござりません、恐れ入りましてござります、この上は平に御容  
教を願ひたう存じます、吉岡は莞爾と笑を含みまして又三、さてさ  
て、身違は心得違ひな仁でござるぞ、相手が宮本氏なればこそ、  
一、刀の下に斬棄てもなさらなんだが、他の若てあれば今頃は身  
違の筋ど首とが別れ、になつて仕舞ふて居る、蛇度以後は省儀  
ッしやるが好からう彌太、各々骨身に染みたことなれば、以後は蛇  
度省儀ッしやい三人、誠、恐れ入りましてござります彌太、チア用が  
ないから各々三人共立、離れ、吾々は此處に残つて少々話の致  
したい事もあつたから、そこで三人は厚く禮を述べて、それ、己  
が屋敷へ引取りました、跡にて開口は、兎に角宮本氏、御身こ

れより中国九州を御修行でござるか、武蔵、イヤ修行ばかりではござ  
らぬ、日外や箱根に於て戦公に別れ申し、その後京都に罷越し  
馬も御承知の、吾れ等が師石川藤助、東齋、流、殿は、先達て肥後、本  
の町、人澤、田屋、左衛門、事、岸柳、なる者を手記が取し、遺恨に  
存じ、加藤忠、殿の、供をなし、江戸表へ参つたる節、佐木、玄、東、齋、  
岸柳が、書に及、びし由、有、馬、喜、兵、衛、より委しく承り、片時も  
相成らぬとは存ずれど、假りにも熊本は大國に致して、殊に彼れ  
は加藤家の臣下、案、り、に、彼、れ、を、討、取、る、こ、と、は、難、し、く、か、る、が、ゆ、え  
に、より、中、國、九、州、を、修、行、を、致、し、幸、ひ、に、手、裏、を、ま、う、け、仇、を、報、い、ん  
と、存、ず、る、こ、ろ、の、必、成、で、ご、さ、る、彌、太、何、さ、ま、左、様、で、ご、さ、る、か、こ、れ、は  
手、前、も、箱、根、に、於、て、其、許、に、申、し、た、る、通、り、充、分、に、心、得、な、く、て、は、後、奴  
を、討、取、る、こ、と、は、餘、程、難、し、く、そ、の、胸、算、に、て、御、用、意、を、な、さ、ら、ん、け、れ  
ば、な、り、ま、せ、ん、ぞ、武、蔵、い、つ、も、な、が、ら、の、御、厚、志、馬、な、う、存、じ、ま、す、



實はそれによきまして、清水殿世音に新誓をかけ、幸ひに飛切といふ事を考へ出しましてござります。この時吉岡も側より又三、只今關口氏の言はる通り、手前も岸柳の事は豫て承知を致し居る、御身の師の群東齋殿も随分御名人ながら、遂には佐々木岸柳の爲めに非命の死を遂げられたる位、素より岸柳を討たうとなさる位、だに依つて、充分の心算はござらう、油断は大敵でござるぞ、斯様に申さずとも御承知あらんかなれど、未だ本年は吾れ等から見れば御若年ゆゑ、いま關口氏の言はる通り、随分共に忸呆ざるやうに武藏「此は兩先生の言葉、真以て辱なう存じます」と話のうち吉岡兼房、抜く手も見せず、宮本武藏に斬つてかゝりました、身を躍らして武藏は、ヤツと一聲諸共に、忽ちバツと空中へ飛上つた、早技、關口バツと膝を打ち、彌太「左こそ」仕たりや吉岡、飛んだらや宮本「と非常に感じ入りました、彌太「イヤそれなれば、屹度

撃てる、又三「天晴れこの手並を見る上は、佐々木岸柳とても討てるに相違ござらぬ、イヤ何うも近頃の名人は其の許なり、吉岡如きが及ぶところのことではござらぬ」武藏は笑を合んで、武藏「誠に恐れ入りましてござります、又三「實は御身の口より承れど、それ實地を見ざれば分らざることをゆゑ、斯かる無禮を仕りしが、案に違はず、只今の術、驚き入つてござる、武藏「併し吉岡先生、貴郎は如何いふ譯で斯様な所に野宿を致されたのでござる、又三「聞き下さい手前とても斯様な所に野宿はしたくはござらぬ、暫く修行のそのうち、持合金の旅費は使ひ果し、甚だ難澁仕り、恥かしながら旅宿に泊るとも相成らず、斯様な譯に相成つたのでござる、武藏「それには、お氣の毒千萬な事ではござらぬ、關口は「イヤ最う吉岡氏、其許ばかりが窮したのではござらぬ、この彌太郎などは随分無法な方だから、箱根に於て雲助の真似まで仕り、既にこれなる宮本氏の助けを受けられた事がござるが、今日は手前當地に門人もあり別











立いたし中国路より九州地方へ赴くに就き、肥後熊本の住人佐々木岸柳の門下の者澤田屋左衛門の仇敵として、武藏を狙ふ者は何處にても我が許を尋ね来るべしと記し置き、遂にこの地を背後になし、彼方此方と見物をしなから、月過ぎ日を送りまして修行をしなから、藝州まで出て参りました、この地の城下にて二三の劍客者を訪問いたしました、腕を試して見ますと、何うも武藏もこの仁と思ふ者もございませんから、幸ひこれまで来たからには日本三景の一つ宮島にも参詣を致したしと、便船を設けて、宮島へ御参詣を致しました、宮島から船に乗り、周防の岩國へ渡り、錦帯橋などそれ見物を致しました、實にこの地は有名なる大内の領分にして、相當に賑うて居ります、これより山口へ参つて、切ゆて城跡などをば見んとて、出掛けて参りましたが、これは九劍山山口城と申して、なかく、名高い城でございます、大内義隆世盛んの頃ほひは、驛者に募り、人を見ること塵芥の如く、

尤もその當時は二十四天下と申し、日本のうちには二十四大名、吾れも武將なり、と、いふやうな氣味合せてござりましたから片時も合戦の止間なく、狐煙時となくして上り、片時も血腥い風の吹かなかッた事はないといふ位、然るに大内の家老陶全、入道といへる者あり、この者反逆を計み、天文二十年主を害し、この地を横領せしめ、その後弘治元年十二月毛利元就と戦ひ、嚴島の合戦に敗北し、遂にこの地は、毛利が領することになりました、これは中国十五年とナツて、羽柴筑前守九州征伐をなさんとするには、中国のうち山口の城が第一の要害地なり、これを乗取らぬに於ては、甚だ便利悪し、と、遂に秀吉はこの城を乗取りました、依つて城跡には二の丸に鎮守とし、山王権現が祭りてございす、その周圍一面には櫻樹が植ゑてございす、故事などを聞き、頃しも三月のこの宮本はこれ等の古戦記を調べ、



ません 武藏「オ、然うぢや、それが世の例ひぢや、併し田舎には珍  
 らしいこの櫻、大した人出があるのウ亭主「へい、最うこの櫻の花  
 のあるうぢだけ、何うぞ、凌げるものでござります」と、話  
 をして居ります、その柄向ふの方より、都合六人連れで、この  
 えて、被衣をかぶり、下男二人、女三人、都合六人連れで、この  
 茶店へ向けて、メイツと這入ッて参りました、が、聽て片傍に腰打掛  
 け、辨當を開き、櫻花を見ながら、話を致しなから、與に入ッ  
 て居られます、櫻と何か話を致しなから、與に入ッ  
 ツ竹の武平、花異香多の万右衛門、提燈の丹平、四  
 途端の兵藏、何れも名を得し悪黨共、今日砂右衛門、伴れず話をし  
 ながら、武平「兄弟分如何ぢや、悪黨共、今日砂右衛門、伴れず話をし  
 た、オ、この茶店には、えらう人が寄ッて居ると云ひつゝ、奥を  
 デイツと見ますと、例のお嬢の一人、群腹に占めたと云ひつゝ、奥を  
 ヤ、と這入ッて参りました、が、何れ眺めても荒やかなる綺の厚

どゆえ、櫻の花は今を盛りと咲揃うて居ります、諸方に茶店もか  
 波せば春めく時候で、町人は錢儲の秋なりとて、腰打掛け武藏「亭  
 つてございませぬから、武藏「片傍のウ亭主「旦那様、こんな淋しい  
 主、當城の櫻はなかく見事ぢや、ウのウ亭主「旦那様、こんな淋しい  
 所でござります、が、花の頃を便りに、マア當地の者は生きて居  
 るのでござります、武藏「ア、イヤ、然うでない、世の中、轉變と居  
 いふものは、致方のないものぢや、いま繁華と申して居ても、また  
 明年に如何いふ事になるかも知れない、繁華と申して居ても、また  
 ちやと言うて居ても、一兩年のうちに如何いふやうな淋しい地  
 ら知れぬ、世の中の様といふものは、何とも言へぬものぢや、わい  
 亭主「そりやア、然うござります、安藝の宮島は清盛公の御幕  
 で、嚴島辨財天を祭りなす、た時分には、一ト際盛んな離れ島で、こ  
 ざい、ました、それが今ではホンの廣島近くには、在の方が見物に  
 出でになるだけのこと、然の、その地は賑はしい場所とも言へ



袍を纏ひ、長やかなる物は腰に穿し、背後には尺八を穿しまして  
管荒やかなる太い鼻緒の下駄を穿き、万右「ヤイ、丹平「ムクン、万右「其處  
に居る彼の女を知つて居るか、丹平「知らないで、家中で名代の娘だも  
の、万右「一ツ御面相を拜見して御酒を一杯頂戴しやう、ちやアないか  
兵衛「ム、好からう」と話してもつて「ドヤ」ト歸へやつて参り、万右  
娘さん、今日はお花見でござりまするか、フカ「ト女中の隣へ  
腰を掛けて、万右「一ツ御馳走になりませう、下男「コリヤ、如何した  
ものか、姫さま今日櫻の花を見物に出で遊ばしたのだ、無禮な  
事をしたたら、爲にならぬぞ、万右「酒を吐すナ、一文奴め、汝等の  
知つた事、ちやアねえ、引込んで居やアがれ、愚問々々吐すと、痛いな  
ひをして、四文取りの供儀のやうな疾痛が出来ると、痛いな  
に居ります、女中は「コレ、お前方はこの姫さまを何と心得て左  
様な無禮な事を申す、武平「引込んで居ろ、エ、阿多福め、汝等の知  
た事、ちやアないわい、娘さん、同じこの境に住んで居る人間、

仇敵の末といふでもなし、氣よく顔ぐらゐ見せてやつて下さつた  
とて、一ツも身も笑やアしますまい、空定めなき花曇、強生の頃の  
好天氣は、そんな物を脱いだら如何てござります、すでに彼衣に手  
のやうな物を脱いだら如何てござります、すでに彼衣に手  
て、御座にも及ばんと致しますから、娘は「ヤア無禮な事を致し  
ては、嫁にならぬぞ、武平「へッ、ナア、一合取つても、武士の娘  
爲になるもならぬも、痴漢が古衣を買つたんちやアあるめえし、  
そんな事を聞いて御免あそばしませと、後へ寄るやうな優しい  
大哥哥、ちやアござりませせん、云ひ草、あ言はずと、一ツその被衣を取  
つて、顔を見せ下さいまし、と行きなりに被衣に手をかけ、四ツ  
竹の武平は取らうと致します、右の娘は無禮であらうぞと言ふよ  
り早く、被衣を放して、武平の手を捉り、グイッ、と逆手に捻上げま  
した、武平「ア、痛い、痛い、真似をさらすナ」と、花は武家の娘だけあつ  
て、チヨイと猪牙おな真似をさらすナ」と、花は武家の娘だけあつ



来て、お嬢を引除けやうと致します、無禮をするか無頼漢と、右衛門の目鼻の間を、紅葉に化粧をしたやうな奇麗な手で一ツ、ちきました万右ア、痛いと言ひながら、鼻を抑へたまし、倒れ、けに顛倒るうちに、武平は頭顛倒と片傍に向け、宛ながら四ツ竹は折れるほど取つて投げられました、女に負けては一分立たぬと辻風提燈、途端の三名、威かす胸算で刀の柄に手をかけ、すでに斯うよと見えたる時、忍ちお嬢は、莞爾と笑をなし、三人をば手玉に取つて突除け飛ばし、女ながら姿にも似合はぬ古今の麗並、辻風は散り提燈は破れ途端の兵藏は途端に打着られ、その見苦しき有様は、言語に断へたることでござります、覺えて居るよこの女、屹度一禮するぞよ」とその儘逃出して仕舞ひました、先刻よりこの体を眺めて居りましたる宮本武藏は「ハテナ、何處の果にも凄まじい者がある、いま彼の婦人を見るに、漸ど年齢は十七八、二十歳にならぬ女と思ふが、なかの段々、彼れてこ

そ武士の娘、威心なものである」と見て居りましたが、尤も武藏の了簡では、次第に依れば助けてやらうと思ふ心もあつたのでございます、右の働きゆゑ、威心を致しました下女ナア姫さま、最ません、早うお歸り遊ばしては、また何のやうな事があるかも知れウ、誠に見苦いことゆゑ、それでは早う歸りませう」と言ひつゝ、此方を振向く顔容、武藏は眺めて見ますれば、實に蟬の髪面、霞の眉毛、丹花の唇、遠山の朝霞に均しき美婦はこれであらうかと斯様申せば造物のやうでございしますが、なか／＼鮮かな女でございます、そのまゝ他の者を引伴れて、再び被衣をかぶつた儘、出やうと致します、折柄此方は五人の奴等、逃行く道にて汝等の若者に、出逢ひました、十四五名の子分の者は、〇親分達、今日の花見は大層早うお歸りてござります、如何いふ譯で武平アア汝等ア好い所へ出て来た、既でのごとに今茶店で女の爲めにこれ



く の 話 終り 意氣地の ない こと、 殊に 此處 捨て 置いては、 町防  
の 陣で 飯の 食上り だ、 依ッて 打殺して 仕舞は けや ならぬ。 ○そり  
やア 親分 達、 詰らぬ こと です、 高が 女のこと だに 武平 然う 行かぬ  
わい、 なか 女に 似合はぬ 腕、 手にも 足にも 合はぬ 女郎 だ  
○假令 手に 合は いても 足に 合は いても、 男が 女を ひどい 目に 遣  
はす のが 手術 では ござり ませんが、 遣は されては 能く 目ない、 ナ  
ア 行き ませう」と 引返 し、 ドヤ くと 二十名 近く の 無頼 漢が、 い  
まお 婆が 引取ら うと する 前に 立塞 がり 武平 ヤア、 よくも 今 瀬産 の  
中 で 赤恥 を 掻か して 呉れた、 お 産か た 出で 来た の ちや、 遠回  
は 然う 自由 に は ならぬ ぞよ、 是非 とも 万公 等が 引掛 げ、 思ひ の 女  
に 樂ま なく フち やア 難辨 が ならぬ」と 同 園から 取掛 きました が、  
瀬茶 店から 離れて 七八 間 向ふ、 此方 の 宮本 は 茶代 と 置いて、 これ  
より 旅宿 を 取らん もの と、 出で 来る 折柄、 この 始末 で ござい ます  
から、 見る に 見愛 ねて フカ くと その 場へ 遣寄 り 武藏 コレ くと、

あ 前方は 如何 した こと だ、 性、 悪も せず 相手 が 女と 侮ッて、 然う い  
ふ こと は 甚だ 穢當 し ならぬ、 先刻 は 酒の 上 の 戯れ と 思ひ し ゆえ、  
此方 も 侮に は 居た が、 口は 利か なんだ が、 町家 の 娘に 投げ られた  
と ても いへば、 お 前 方の 恥辱 にも なる こと であら うが、 武士 の 娘  
に 投げ られた とて、 殊に 恥辱 といふ ことも なく、 イヤ 最う 酒の 上と  
いふ もの は、 度々 間違ひ の 出来 る もの ぢやに 依ッて、 勘辨 を さッ  
し やれ、 馬鹿 な 事 を して は 宜し くない 武平 ヤ、 ヲッ この 素浪 人め、  
見り やア 草鞋 掛け 田舎 武士 の 分際 で、 汝等 が 譯を 知ッた かエ、 愚  
圖々々 言は ず に 引込 んで 居ろ エ」 新様 な 取る に 足ら ざる 者を 相手  
に して、 立腹 する やう な 武藏 では ござい ませんが、 さて 何う  
も 憎む べき 奴と 思ひ ました から 武藏 痛い 目を せぬ やう に 思ふ ゆ  
え、 程よく 口を 利いて やり、 事を 穏かに 納めんと する に、 斯かる  
無禮 な 言葉 を ば吐く 以上 は、 最う 勘辨 は 相成ら ぬ、 女に 拘らず 此  
方が 相手 だぞ 砂右、 エ、 ヲッ 猫牙 才な、 汝等 の やう な 素浪 人が、 相手







別な腕並、書に描いてあるのは見たが、真個に打着けられるといふのは今日が初めて、手の利いた方といふものは、頗るしいものだナ」とワイ／＼申して歸る者もあり、又はこれより花見に出掛ける者もありまして、區々の噂、折柄武藏は右の婦人と同道して参る向ふの方より馬乗にて槍を小脇に抱込み、家來を引伴れ、士煙を蹴立て、駆つて参る武士あり、これは同國の御藩、即ちこれなるお嬢の父御にごさいます、いま花見の場所に於き、當處の無頼漢等が押込んで、嬢に無禮をなし、怪しからぬ舉動との事を聞き、呉れんと、老人ながらも疝癪なる方、どころへ此方は武藏に送られ参りましたることをゆゑに、○オ、○何事もなかつたか、只今當處の奉行、正木源右衛門に傳へ置き、追付け捕方も差向ける都合を致して置いたが、曲者輩は如何いたした娘ハイ、これなるお武

家が助け下されまして、云々の譯柄、○それは辱けない、ア、さるといふは悉けなし、マア鬼に角手前の屋敷まで何うかお越し下さるやう武藏イヤ御親父でござるか、最早其許様にお目にかつて、これなる御息女をお引渡し申せば、拙者も最う心置くとなく、旅先の武士ゆゑ、卒ざ御免蒙る、○イヤそれでは餘り本意なく、但し馬上の挨拶ゆゑ、其許は御意に召さず、立腹の餘りお引取りに相成るのか武藏「なか／＼以て左様な譯ではござらぬ、○それなれば何故お越し下さらぬ」と斯う言はれて見ますれば、引取るも何とやらと思ひましたから武藏「然らばお茶なりども一服御馳走になりませう、○イヤそれこそ身も満足いたしました、お出で下され」是にて同道いたし、屋敷へ立歸つて参りましたが、抑もこの老人は如何なる仁でございませうか、例に依つてチヨツと休島。



第四回

さて武藏は彼の老人と連立ッて屋敷へ立歸りますると、町亭に武藏を案内を致し、奥室へ通しました、見るどなか、立派な屋敷、堂々たる御重役であらと思ひながら、總て座敷へ通りました、何卒これへ」と梅を携へ、女中は案内を致しました、老人は「サア何卒これへ」なか、容易に梅の上へは坐りません、手を突きまして武藏「不思議な御縁にて、途中ながらの御面會、手前事は宮本武藏と申者でござる、〇「ナニ宮本とナして、前から武藏と申されたのか、武藏「イヤ尤も手前は宮本武藏と申すが實名でござります、改めて武藏といへる名を許されたのでござります、〇「ム、ウ、御身が父は尚しや播州平福在の郷士、宮本武右衛門とは申さぬか、武藏「如何にも左様でござります、老人は確と膝を打ちまして、〇「左こそ御身は赤松武藏と申したともあらうな、武藏「ハ、ッ、何うし

て左様な委しい事を御存じでござりますか、〇「知らいで何うしやう、御身の父と拙者とは、取りも直さず兄弟ぢや、武藏「エ、ッ」ど武藏は驚きました、武藏「さては貴郎様は、〇「毛利家の藩士臼井主計と申す者ぢや、武藏「でござりましたか、稚なさうちより左様な事を父より承りたやうに心得ますれど、殆んど相忘れ、今日まで虚々いたして居りました、主計「娘、不思議な縁で好い仁に出會うた、其方とは約婚ぢやわい、娘「父上様、豫て承りました武藏「機と仰せられまするは、主計「これぢやわい、武藏「ヒョンな顔を致しまして、武藏「さてはあなたが叔父上でござりますか、主計「ム、〇「親父の武右衛門とは異腹の兄弟ぢやわい、腹は借物、胤は一ツの兄弟なれば、取りも直さず爾とは叔父甥、武藏「ア、成長いたしたのウ、サア、然う聞いたれば、最う何處へもやりませぬ身不肖なれど、臼井が養子、娘九重は今日から爾が女房ぢや、武藏「ア、イヤその儀は餘り突然な話、主計「突然も何もない、何卒手前方の



養子となつて呉れ、頼む、其方難なき時、この九重とは約婚致した  
儘、その儘に捨て置きしが、斯かる所で都合ふとは思ひも依らず  
偏にこれ日頃信ずる神々の引合せてもあらうのウ娘、九重父上様  
仰せの通りでござります、と言ひつゝ顔を凝らめました、主計して  
父は無事かな、武蔵除りの事に驚きまして、私合點の参らざるこ  
これには叔父上、御外の事もござります、先づ織談の所は、  
主計「マア可いわい、織談も何も要らぬ、最う極つた話ぢや、彼れ此  
れ言ふには及ばぬ、武右衛門殿は存生で現世に在らるか、武蔵、御  
意にござります、その父上に永らくの間、訪れも致しません、處々  
方々ど修行を仕り、流れたが、この中、國へ参りました、主計「イヤ  
君、いうちは二度はない、武家町人の落てはあれど、懸に上下はな  
い、わいやい、多分、織談の風流りでは面白くないところより、江戸  
の地へても参つて、武右衛門殿は何處かへ仕へられ、織談を飛騨し、  
知の至り、敢書でも致して、それゆゑに親の許を飛騨し、

聞いて天、噂れなる武士といはれ、故郷へ歸參をせんといふ心  
あらう、今、時、彼れが無親者をば探り、或は幸き目に逢はす  
たらう、今、時、彼れが無親者をば探り、或は幸き目に逢はす  
か、つたわい、娘、天、噂れなる手並に、なつて居つたであらう、  
御意にござります、主計「コリヤ武蔵、よく聞け、身が娘は女でこそ  
あれ、國に於ては、國分、然う人の下に、付く者ではない、可なり、手  
は、此の主計の養子、それが成心する位、ゆゑ、餘程の武術、織談、  
々々、この主計の養子、これ、迷家千蔵なことであると宮本も心  
中、には、思ひました、が、何うも一時に話す、或は、何ばかりか、  
ら、武蔵、叔父上、御外の事に取、りまして、如何ばかりか、  
う、存じ、奉ります、この武蔵は、決して、江戸表へ、懸、越し、暫く、  
で、は、ござりません、實は、父、諸共、に、不、圖、せし、ところより、  
住居を致し居ります、實は、父、諸共、に、不、圖、せし、ところより、  
家に仕へられました、主計「ム、ウ、して、其方は、武蔵、然れば、  
で、は、ござりません、實は、父、諸共、に、不、圖、せし、ところより、



ます、圖らず些かの間違ひより、私武術の師石川殿流といへる者に遺恨を含みし肥後國熊本に住人、澤田屋左衛門と云る者、岸柳といふ名前を付けて江戸へ参り道場を開き色々の遺恨よりして手前をば目黒の片傍に於て一命を絶たんとせしゆゑ、已むことを得ずその場に斬棄て、その儘江戸の地を背後になし、尤も父の許しを受けまして、修行に出でたることにござります、それゆゑ手前は未だ父の許へは便りも致しませんやうな次第、主計ム、ウ、左様な事なら立派な事ぢや、ア、イヤ然らば武右衛門殿の方へ此方から手紙を出すであらう、彼れ此れと兄も小言をいふべき謂れもない、素より播磨に在りし、砌りは、此方は始終訪れも致して居ッたが、その後には中絶をした、道理こそあれ、江戸へ参つて然ういふ事に、兄も日頃の居らるゝか、誠に何うも喜ばしきことである、それから、兄の返事の望みを達しられたいふもの、鬼に角書面を遣す

卒して引止め、主計は客宅に置きたい、横しまた江戸へ立歸り、小笠原家に仕へるにもせよ、武藏の女房にしたといふ腹がございませすから、何かに就けて立たしともなく思ふて居りました、また武藏も斯ういふ事になつて見ますれば、何うも一泊いたして直翌日草鞋を穿くといふ譯にも参りませず、殊に叔父は親父の許を聞き手紙まで出して呉れましたことゆゑ、遂にこの家に滞在といふ事になりました、主計は奥方とも相談を致されました、極める方が好からう、世にいと蔭裏の豆も何とやら例し、縦合如何の位の望みがあるにもせよ、内縁なりとも結ばせたく思ふが如何なものである女房、ハイ御有理にござります、主計それでは唇を取出し、吉き日を探みて、何といふかは知らねども、先づ無理からでも彼れと夫婦にする胸算ぢや女房、大きに左様でござります、



主計「明十五日は日も吉ければ、明日内縁を取結ばせるとしやう、女房「それでは武藏様へその事を仰せられましては如何でござりませう、主計「イヤその際まで言はぬ方が好い、彼れに言へば、望みもある人間ゆゑ、何うだ斯うだと申して断るに極つて居る、また身が娘も憚りながら家中に於て二とは下らぬ美人、親の慾目かは知らねども先づ續く者もあるまいと思ふ、最う十九にもなつて居る者、粧ひを立派にさして、武藏の側へやつたれば、大概の事は捨て、も夫婦にならうわい、女房「ても貴郎……主計「イヤ最う黙つて娘の支度を致せ、女房「それで宜しうござりまするか、主計「宜いども、夫婦は内々に相談を極めまして、さて翌日となりませうと料理萬端の誂へ、それ／＼出入の者に吩咐け、誰れは何をせい、彼れは斯うせい、料理人が参ればこの處に斯く／＼せいと一々の指圖、武藏には少しも分つて居りませんが、何ぢやバタ／＼家内が騒いで居りますから、「ハテナ、叔父上は浪人の拙者をば食客にお置きなさればと

て斯かる拵へをなさる謂れもないが可怪なものである」と思つて居ります、時に娘九重は、限りなく喜び、腰元共が申すに従ひ、總ての衣類は下衣は雌蝶の模様取にて、上衣は雄蝶の模様物を纏ひ、それ／＼用意を致して居ります、ところへ魚屋が荷を擔込み、料理人はこれを料理にかゝります、八百屋が来て刺物をするといふ、更に武藏は分りませんが、左右するうちに湯が立ちましたから、お召し遊ばせよの案内に、武藏は「何卒先づ叔父上に下女「イヤ是非とも今日は貴郎お先へお入浴を願ひます、武藏「イヤそれは痛み入る下女「イヤ何卒是非お湯にお召し遊ばしませ」このことに、不思議晴れやらず致して武藏は「然らば折角叔父上の仰せゆゑ、お先へ頂戴を致さう」とそこで湯に入りまして、湯から上つて参ります、すると家來「お頭髮をば直し申させう、武藏「これは辱ない」そこで一人の家來「お頭髮を結ぶて貰ひました」と衣服を持つて参ります、遊ばせよ、旦那の仰せでござります」と衣服を持つて参ります、



ア、叔父上なればこそ何から何までお心をば付けられ、有難く頂戴仕る」と衣類を着替へかたし居りまする、下女は出掛け  
て参り参り参りして「サア何卒お座敷へ」どのことに、武藏は座敷へ  
やッて参りまする、主計夫婦は其處に控へて居ります主計「サア  
何卒武藏やこれへ武藏御免下さりませ、色々の心添、辱けなう  
存じ奉ります、して叔父上、今日は何ぞあなたのお誕生日にでも  
當りましてのこととござりませ、朝より何となく大したお拵へ  
の様子、合點参らぬと雖も、只仰せに従ひ、慙く衣服までも戴き  
ましたやうな次第、主計「イヤサ宮本、汝には分るまいが、ア、今日  
は如何なる吉日ぞ、暦を見れば古今日は吉し、望みのある身の其  
方がゆゑ、強ひて止めは致さぬが、親と親との約婚、身不肖ながら  
身が娘、押付けがましい話だが、この九重と夫婦の盃を致して呉  
りやれ」との言葉に、武藏は殊の外に驚き入つたことにござりま  
上、心にもなき仰せを承り、ちつに驚き入つたことにござりま

す主計「サア、有理ちやけれど武藏、親の慾目で言ふではないが  
身が娘の九重は、正敷見苦しいと言ふ程の女でもあるまい、汝が  
女房に致して江戸表へ伴歸ればとて、朋輩の者に見られても、汝が  
はれるといふやうな者なれば、強ひて勸めは致さぬぞ、何うぞ新  
うぞ十人並には行く女、其方修行中預つて置かうが、最う年頃の  
娘ゆゑ、何うか内縁だけは取極めて置いて呉れ、武藏「決して仰せを背  
くではござりませぬが、これには色々……主計「サア、譯もあらう」  
と只何を申しても叔父は逆らはず、一點張に縁談を勧めまする、  
武藏「何うも叔父上、私あなたのお言葉に従ひませぬは、不本意の  
やうに存じますれど、これを思へば先日この事を申し上げて置  
ましたれば、斯かるお物入はあさせ申しませぬだに、誠に武藏  
の過失でござります、一通りお聞き下され」と言葉の改めて申  
しますから、そこは町人とは違ひまして、堂々たる身分のある武  
士でござりますから、主計「ム、其方も並勝れたる器量人、天晴れ



なる人物と見て此方は惚れたのであるが、それが言を改めて言ふ  
からには、何ぞ深い仔細のあることであらう、事柄に依つては強  
ひて婚禮を勤める譯には參らぬ、その譯は如何な事ぢや武藏然れ  
ばでござりませす、既に先日は話申したる如く、手前の師は藝州蝦  
蟇ヶ峰の住人、戸田彌六左衛門清玄先生の門人、前名石川紋彌事、石川  
群東齊殿、流主計、ム、ム、その仁に就いて武術を學んだのぢやナ、  
武藏御意にござります、然るに澤田屋左衛門の偽岸流、餘りと  
申せば人も無氣なる致方ゆゑ、敢て先方の妨げをするではござり  
ませぬど、同門中の梅津某なる者が、彼れが爲めに嘲弄をされ立  
歸つたるゆゑ、若氣の至り無念に存じ、彼れの道場に於て、手前  
が様々なる事をして戻つたのを遣恨に思ふての騒動より、澤田屋  
左衛門をば、目黒に於て殺害に及びましたる始末、主計、ム、ム、承  
つた、それから如何いたした武藏然ればござります、その左  
衛門の師たる肥後熊本の住人、加藤家の臣、佐々木玄東齋岸柳と云

る者、我師石川群東齋殿流を殺害に及びましたる事を、京都に於  
き、承つてより、無念骨髄に徹し、須彌蓋の師の恩を忘るゝ暇些  
かもなきこの武藏、何卒いたして師の仇を報はん、心は勇猛に  
悉やれども、佐々木岸柳といへる者は、下野國の住人、堤山城入道  
實山に流儀を學び、堤山流の振杖といふもの、に妙を得、且つま  
た彼れが古今の早技なるは、人の術を極ふこと、不思議に妙を得し  
剛の者なれば、これを取らんには、餘程の工夫を致しませんけ  
ればならぬと、紀伊國の住人、關口彌太郎氏章なる先生にこの事を  
承り、且つは吉岡又三郎殿にもこの事を聞き、何卒いたしてこの  
佐々木岸柳を討つて、師の靈魂を慰め、相手は同じし佐々木  
これあらず、討つ撃たるは、時の運といへど、相手は同じし佐々木  
岸柳、討たうといふは、我心にあり、討つと撃たるは、折角丸重どのを  
不俱戴天の師の取、首尾よく本懐達するまで、實に申すもなきこと  
妻に致しましても、偷しもの事のある時は、實に申すもなきこと



ゆゑ、この道理を御聞分け下し置かれまして、この縁談は暫くのうちに御見合せ下されたく、就きましては父武右衛門の許へ書面を  
あ出し下されまじたることゆゑ、多分父武右衛門から、その返事  
が参るのでござりませう、それとも父の武右衛門が、師の仇討は  
兎も角も、甥姪夫婦のことゆゑに、縁談を取結んで、面して後  
緩々ど仇を報ふも晩かるまじといふやうな書面が参りましたるこ  
となれば、子として父の言葉に背くの謂れなければ、兎も角もあ  
なたの心に従ひも致しませうが多分叔父上、あなたは縁談の事  
も父の許へ記して出下されたでござりませう、主計「それは然  
うとて、それが此方何より心に懸ること、久々兄弟の訪れ位な  
事なれば、何日か出して可い手紙、身が急ぐのは縁談ばかり、第  
一番にその事が書いてある武藏、然らばその返事の参りますまでの  
うち御見合せ下されませう、多分父の手紙にも、石川殿流先生の  
の事を認めて参るでござりませう、主計「イヤそんな話とは知らず、

逸失た事を致した、こりや何うも仕方がない、婚禮の中止だ、奥  
や女房「ハイ主計「娘の白粉を落させい女房「旦那様、如何なりまして  
ござりませう、主計「テヨツと婚禮は見合せ、何うも斯う話を聞いて  
見れば是非がない、女房「ア、妾も此處にて話を承りますれば、強  
ひて只今武藏様へお勧め申す譯にも参りませぬ、主計「娘、假令何の  
やうに思ふても、慫う聞いて見れば、どうも婚禮は出来ぬ、九重ハ  
イ、左様でござりまするか、夜前から今朝まで二十八通も湯に入浴  
り、白粉の十三通も仕直してこのやうな事にならうとは……主計「如  
何も思はなんだであらう拙者も知らずに居つたわい、えらい事に  
なつた、ア、その料理は皆家來共に遣せ、九重「雌蝶を下に仰向けに  
雄蝶を上を寫せしは、これ婚禮の印しぞと、此處で衣物を重着し  
て待ちましたのも……主計「脱げ、途方もない事になつて仕舞つた  
が併し武藏、それでは赤紙付くらぬ譯ではない、急ぎにいそい  
で参るやう、遙々と中国より江戸まで出したる書面、一時も早く



返事を送るやうと言ふてやつたから、豊夫町人の手紙とは違ひ、  
飛脚屋でも等閑には致すまい。武蔵、それは叔父上、別に飛脚でも立  
てたでござりませう。主計「ア、その位はな事はしたであらう、マア  
返事の来るまでは見合さう」と是で物入損となりました。白井主計  
ゆゑ、敢て金銀に厭ひはござりませんが、これだけの身分のある白井主計  
に止まつて、江戸表よりの返事を相待つことに成りました。が、そ  
の日はそのまゝ、済んで仕舞ひまして、翌日となりまして、白井主計  
先へ一人の武士、入来り案内を乞ひ、〇「御免下され、白井主計様と  
仰せられるお屋敷は此方でございますか」家來は執次に出でまして、  
執次「ハイ、當家は白井でございますが、其許は何方から、〇「イヤ身は  
浪人者でござる、承れば當家に當時御滞在なる宮本武蔵大先生に  
少々お目にかゝりたき事あつて罷出でましたる事でございます。何  
卒、執次を下さりたい。執次「左様でございますか、然らば其處に暫時

控へなされ」と待たして置いて、執次は奥室へ参り手を支へ、執次「宮  
本先生、武蔵「ア、何ぢや、執次「誰方が貴郎に少々お目にかゝりたいと  
申して参りました。武蔵「ム、左様か、姓名は何と申す。執次「只何とも  
お名前は、武蔵「然うか、兎に角會はう」この時主計は傍より主計「待  
て、武蔵、身はこれより登城を致す身であるけれど、爾は大切  
なる身体ではないか、先方の名前も糺さずに、然る浪人者に虚々  
と出會うて、尙しもの事のあつた時には、千日に對つた萱ぢや、  
武蔵「叔父上、お心置きなう御登城を下され、手前はそやうな不  
意を打たるゝやうな事は決してござりませぬから、主計「ム、マア  
爾なれば然うであらうが、この間娘の一條に就いても、爾の働  
天晴れなる腕並であるといふ事は聞いて居るから、それ其方油  
断はあるまい、尙し殊にまた當處の町奉行正木も、無頼漢を召捕つて  
から己來、尙し油断なく當處をば調べ居るから、怪しな者も來まい  
なれど、尙しやこの間打漏らされた悪人輩めが、武術家にても頗



み込み、出拔けに爾をば斬付けでもしはせぬかと、年老といふ者は、詰らぬ事に心配いたすものぢやわい、武藏「イヤ段々と叔父上の思召し、辱なう存じます、決してその邊の御心配には及びません、主計「然うかナ、が、油断は大敵ぢやぞ、武藏「心得ました、小刀前半につけ、大剣を手に提げて、玄關へズイツと出て参りました宮本武藏、訪れ参られたるは如何なる方であるかと、様子を見ますれば、古びれましたる衣類に、汚れたる袴を穿き、草鞋穿きで立ッて居りますする一人の武士「先生、お懐しう存じます、御貴公様のお噂を承り、餘りの懐しさに、幸ひなるかな御當家にお在でなさると承りお訪ね申しました、有馬喜兵衛でござります、武藏「ム、有馬氏でござるか、ア、久しく會ひませなんだ、如何なされた、喜兵「然ればでござります、先生と京都に於てお別れ申した儘手前は尊公の武術に御鍛練なるを見て、感に絶えたるどころより、鳴、都鞍馬山に立籠り、一心不乱に武術をば學びましたと言ふは、

呼がましいやうであります、私は一心に立木を師匠と致して小手を固めました、未だその極意にも涉らざれど、あはれ宮本先生のお往方を慕ひ申し、何卒先生に従ひ、奥義に涉つて、二刀流の奥義をば御傳授を願ひたいと存じ、お跡をば慕ひましたる、この、作州津山に於て、關口吉岡兩先生、且つ尊公がお出會ひになつたる事を承り、ア、残念の至り、早く参ればこの地でお目にかけられるものを、愚圖々々いたし居つたるゆゑ、最早年越にも相成り、何處に在しますやらど、彼方此方とお尋ね申し、不圖この國へ参りしところ、この中櫻の花見の手違ひとやらで、腕を願したる武士あり、確か宮本先生といふやうに聞いたと町人の噂、レ懐しや宮本先生、この地においであるこそ天の與へと打喜び段々尋ねて見ますれば、御當家に御滞在との由、取る物も取敢ず、敢かる淺猿しき姿をも願みず、お伺ひ申したやうな次第でござります、武藏「それはようこそお出であつた、暫時其處にて待たッしや



い、叔父上に一應申して見やうから喜兵「叔父上とは武藏イヤ手前も知らずく参ッて、圖らず出會ひしことござるが、當家は吾れ等が爲めには叔父に當るところの曰井主計殿の屋敷でござる、喜兵「左様でござりましたか」是にて右の趣をば武藏は主計に話しますると主計「然ういふ者なら苦しからぬ、共々身が許に留めて置

すに依ッて、久々の物語でも致されよ、コリヤ〜客人は膳部を出し、且つはまた酒の用意をして出すが好い」と言ひ置いたなり主計「喜兵衛殿、緩容と休息を致されよ喜兵「最早御主人には主計登城いたさんければならぬから」とこの儘主計は馬乗にて登城いたされました、跡で此方は兩人、色々の話に時間を費し喜兵「先生仇敵の手掛りを求めになりましたか如何なことで武藏「然ればな



面を遣し、實はその返事を相待つて居る爲め、心ならずも逗留を致して居ることござる、貴殿はこの武父に従ひ、共に一臂の力を添へて下さる御了簡か喜兵なかく以ちまして、迎も宮本先生のお力になるなぞいふ腕はござりませぬぞ、久々お出會ひ申したことゆゑ、一遍は試しても戴きたうござります、武蔵も何さ余程藝道も熱練を致されたであらう、第一貴殿も武術熱心なる御仁、久々のことゆゑ、叔父上下城相成れば、庭前に於て一本の試合を致して見やう」と相待つうちに、刻限來れば主計は屋敷へ立歸りました「お歸り」と言ふので、直に家内は出迎へ、主計は奥室へ通りますと主計武蔵、如何ちや、幾日経つても話は盡きまいが、して酒は飲んだか、武蔵「ハイ、多分に頂戴いたしました喜兵、これは御主人、お歸りでござりますか、主計有馬氏、何にもござらぬが、何うて御身は武蔵と諸共にお立なさる了簡で、何れもござれた仁ゆゑ、手紙の返事の参るまでは、お心置きなく逗留あれ

武蔵「叔父上、實は先刻も有馬氏とも申して居つたやうなことで、この仁は京都鞍馬山にて艱難を致し、餘程の腕並にもなつたであらうと存じますから、一本庭前に於て腕試しを致したいと心得て居ります、主計ム、ウ、それは至極好からう、ア、此方も見たい事ぢや、汝の家は先祖代々から十手二本を使ふといふ事を心得て居るなれど、吾れは不幸に致して、その二本の十手を使ふことを辨へなだ、汝は確か二刀といふ事を、爪かきにて居る、依つて其方の武術の程も見たいものぢや、是に於て武蔵は本劍を借受けまして、前へ下ります、有馬も持参の木劍を携へ、聽て臼井の屋敷の廣々と致したる庭前に於きまして、双方ともに支度にかゝりました、主計は金柑頭を光らして、椽側に出で、一心に見物をして居ります、主計「娘九重、汝も少しは心得あること、良人の試合ぢや、見て置け、九重御免あそばせ」と言ひつゝ、九重始め奥方までも其處へ出て、今や有馬と宮本の試合に、一心不乱に目を着けて居りま



した、有馬は曠の場所、「先生御免」せ位取を致し、太刀を入奥に  
取つて、左の足から踏出し、擽へをつけさせる、武藏は例の十字  
の擽へ、双方共に睨み合ひました、ところ毛筋の隙もございませ  
ん、この時喜兵衛は大喝一聲、諸共に、鞍馬の山にて修行の太刀筋  
曳と言ひさま打込むを、心得たりと左剣で受止め、右剣を以て拂  
はうと致し、打込む時、有馬喜兵衛は早くも振潜りまして、右  
藏の手許に参る、武藏は左剣を取直し、ガツキと受止め、右  
上より打下さうとする所を、有馬は一足退つて右剣を止めて左  
をば殺し、体を退けたる時、流石の武藏も一足退り、武藏「ア天晴  
れ出来した有馬氏、この手並を見れば勝つては、他人は知らず先づ武  
藏の眼にては、一人前には勝れた腕並、勝敗はこれで宜し、喜兵  
ハ、ツ、辱なう存じ奉る、武藏「京都で出會うた時となら、段が變り  
ましたぞ、一心の他に味方なしとは、有馬氏、此處の事でごさる」  
この時曰井主計は「宮本、勝負はこれで仕舞か、武藏「御意にごさる」

ます、主計「ア、何うも出来る者同士、試合といふものは、吾々の目  
には分らぬものである、娘、汝には分つたか、九重「父上、有馬様と  
いへるお方は、なかく、ようお使ひでござりますナ、彼れて宮本  
先生とお立合になつた時に、眞剣なれば有馬様の衣物の袖しか微  
ッては居りません、身体には傷は付いて居りますまい、主計「ム、  
ウ左様か、老眼でもあり、其處まで拙者には氣が付かなんだが、  
よくお出来なさるのウ有馬殿は、九重「鮮やかな腕並でござります、  
主計「宮本、有馬氏もよく出来るナ、武藏「イヤ餘程の腕並に成まして  
ござります、喜兵衛「宮本先生、この上は其許様の門下にお加へ下され  
まして、武藏「イヤ門下どころではござらぬ、天晴れ我兄弟ともなる  
べき手並、永く宮本と共に申さう、と是にていよ、宮本と有馬は  
ん眼りは、其許にお許し申さう、と是にていよ、宮本と有馬は  
師弟の約を結びまして、その日はそのまゝ濟みまして、さて翌日  
となりまして、何うせ江戸の返事の來るまでは、居ねばならぬ



身体、この地を委しく見物を致さんと、宮本は有馬と連立ちまし  
て見物に出ましたが、茲に一つの間違ひを惹出し、これから有馬  
喜兵衛が武勇を奮ふといふのお話でございます。

第五席

さて宮本は有馬と二人で、翌日は白井方にて辨當瓢の用意をし  
て貰ひ、これを携へ兩名は、ブラ／＼と出掛ましたが途次豫て叔  
父にも聞いて居る周防の鰐石といふ名所を見やうとて、話をしな  
がらやつて参りました、片傍の茶店にズイツと這入りますと、亭  
主は「お出で遊ばしませ 武藏、暫時の間見晴しの好い所で一献催し  
たいから亭主、サア何卒室が明いてござりますから、お宜しい所へ  
お通りを願ひます」そこで兩人は座敷に來り、障子を開放して、  
春先の事ではあります、彼方の風景此方の景色などを眺めて  
武藏「なんと有馬、何うも長閑な眺望ではないか 喜兵衛先生、即ちこ

ござります」とこれより兩人は辨當を開き、互ひに四方八方の話  
をして飲んで居ります、折柄隣の座敷へ四五名の子弟を引連れ  
ドヤ／＼と這入つて参りましたは、無双の權之助といふ、在下に  
於て無頼漢の頭でございませ、却つてひどい目に出遭ひました悪黨共  
の娘の九重に悪戯をして、却つてひどい目に出遭ひました悪黨共  
の頭でございませ、權之助老爺、亭主「イヤこれは親方、お出でなさいま  
し、權之助ア、旨さうな物で一杯飲まして呉れ」亭主は溢々の面をし  
ながら「ア、また今日も無料飲倒され、揚句の果には暴れられ、  
詰らぬ事にでもなりはしまいか」と案じながらも致方がございま  
せんから、酒肴を拵へて出しました、この時無双の權之助は子弟  
にむかつて權之助、オイ、彼の向ふに居る奴ア、彼りやア見覺えはな  
いか、〇イヤ親分見覺えがないどころではござりません、先達て  
兄弟分をば櫻の花見の節に、詰い目に遣はせやアがツた浪人者は  
此方に居る奴でござります、權之助ム、ウ然うか、當時當處に足を留



めて、白井主計の許に食客をして居るとかいふのは彼の野郎か  
○左様でござります権之、ム、ウ、此方の奴は何だ、○エ、彼り  
やア見た事も無い奴です、けれども當分如彼やつて一緒に居るか  
らには、何れ縁故のある浪人でござりませう権之、ム、ウ第一浪人  
者がこの國へ出て来て、乃公の宅へ挨拶に来ないんて、野方途な  
奴だ、一ツ乃公から難詰をしてやるから、貴様等アその胸算で居  
ろ、○承知いたしました權之、近所へ行つて菓子折を一つ求めて  
来い、權之助は若者に菓子折を求めさせ、權之助はこれを携へま  
して、武藏と喜兵衛が飲んで居ります座敷へ出掛けて参りました  
た權之、御免なさいまし武藏ア、何ぢや權之、私にこの在下で無双の  
權之助といへる者でござります、お見受申せば、貴郎方には當處  
伊見物にお出遊ばしましたか、お見受申せば、但しは當地に足  
を留めて、武術の道場でもお開きなさいませう胸算でお出なすつた  
のか、如何いふ胸算で武藏イヤ吾れ等は左様な望みがあつて來

たのではない、通りかゝりてツイ當處に一泊をせんとせしに、不  
思議な縁でこの地に縁者があつて、遂に滞在をするやうな事にな  
つたが、近々のうちに當地を立たねばならぬ者だ權之、何方の御藩  
様で武藏ア、身共は浪人者だ權之、ヘエ、浪人衆ならこの國へお  
出でになりましたら、何はさて置き、私の方へお便り下さらねば  
ならぬが例でござりますか、武藏ハ、ア、然うかは知らねども、如  
何いふものでござりますか、武藏ハ、ア、然うかは知らねども、敢  
て貴様が武士といふてはなし、縦しんば汝が何れ程の劍客者にし  
て、立派な道場を開いて居るにも致せ、吾々は武術を以て一宿一  
飯を乞ひたいといふ、懐裡に旅金もなくして、往來をする者でな  
ければ、汝が武術家として、別に訪れんければならぬといふ譯もな  
のにはあるまいか、貴様は無双の權之助かは知らぬけれども、此方  
に於てもこれまで旅行を致し居るうちに聞いた事もない名前、周  
防へ参れば必らず汝の宅へ立寄りらんければならぬといふやうなこ



とは、指圖を受けた事も無い、喜兵衛、然うではないか、喜兵衛、左様、  
々々、縁故のない貴様達に、斯様な菓子折の、一ト折でも申受ける  
謂れはない、する、と權之助、素より無法な奴で、身から無双など、  
いふ名前を付けて、威張ッて居る奴でございませうから、己れを知  
ッて他を知らざる馬鹿者、權之、ヤイ、麥飯、喫ひの素浪人、野方、  
い事を吐きやアがる、他國は知らず、周防の國へ出て来て、乃公を  
知らなければ、岩國で錦帯橋を知らぬも同様だ、この菓子折を持  
ッて行けの滑ッたのッて、生意氣な事を言やアがる、武家町人の  
隔てはあれど、旅から旅へ渡る苦勞人に異ッた事はあるまい、  
の挨拶を知らぬ奴だ、殊に汝れは先達て乃公の若者を櫻の花見の  
折柄、手厳き目に遣はした事があるさうだ、今日は此處で出遣う  
たが幸ひ、只では還さぬに依ッて、その胸算で居ろ、武藏は心中  
に、ア、さてはど心得ましたから、笑を合んで居ります、喜兵衛、  
喜兵衛、宮本先生、武藏、ム、喜兵衛、貴郎、何ぞ、喜兵衛、

えがござりまするか、武藏、ム、それは當處へ參ッた時、今の日井の  
娘の九重を、無頼漢等が取持いて惡戯を致し、九重の爲めに、  
目に、出遣ひ、それを遣へに見兼ねたに依ッて、我着けてやッた喜兵衛、  
無頼漢が打寄り、他愛もないこととした事がある、その節、  
加勢を致して、見るに思ふて居ます、コ、コ、コ、馬鹿な事を言ふ、  
、ア、それを遣へに見兼ねたに依ッて、我着けてやッた喜兵衛、  
汝等のやうな者が何百人參ッたとして、この先生の片腕にも足りは  
せぬ、餘計な事を言はずに、その折を持ッて彼方へ行け、また小  
費、錢でも欲しければ、譯を言ッて泣付けば、些細な事は、  
らぬ事もない、權之、イヤ、この田舎武士が、乃公を捉まへて、  
食のやうに思ッて居やアがる、ナ、ナ、ナ、然う吐しやア用掛はない  
力でも一番汝等を首背をさしなさせやア、智、又の權之、  
國で飯が奥へぬわい、喜兵衛、然う申せば仕方がない、先生、不  
思ひまするけれども、好、ひものなら、打斬ッてやりませう、  
武藏、イヤ



それは止すが好からう、三歳の小兒に均しき奴、喜兵「ちやと申して  
餘りの過言、武藏「棄て置かッしやい、人間が物を言ふと思へば腹が  
立つ、蚊が鳴くと思へば厭いで事が済むわい、權之「イヤ汝れ人  
を蚊だの何だのと、色々な事を言アがる、サア、然う吐すなら  
勝負をしろ、喜兵「望みとあらば、有馬喜兵衛は起上りました、こ  
の時、茶屋の亭主は驚いて、顔色蒼醒めて飛んで参り、亭主「旦那様、  
この場は彼れ此れ致されましては、甚だ迷惑を致しますよッて、  
強ッて勝負を遊ばさんければならぬようなことでございますなら  
場所は廣い所が幾らもございませぬから、何卒その方角へ出まし  
を願ひます、恐れる中にも怒は忘れぬ老爺でございませぬから頭を  
掻きながら亭主「殊に御勘定も未だ頂いてございませぬで、武藏「イヤ  
成程、それは有理な事ぢや、その萬端の勘定書を持つて来い、  
前の宅へ迷惑を懸ける道理はない、有馬喜兵「ハイ、武藏「何うしても  
身はやる胸算か、喜兵「ネ、先生、こんな奴は片付けて了ふ方が宜

しちござりませぬ、鞍馬山に於て艱難辛苦を致し、遙々先生の跡  
を慕ひ罷越した私、小鬘の先に汗を流しても、未だこれといふ眞  
鍬の勝敗をして見たこととがござりませぬ、取るに足らざる奴どは  
言ひながら、好むことなら及ぶの筈、思ひ切ッて打斬ッてやりませ  
う、武藏「イヤ甚だ無益の殺生のやうに思ふが、權之「此奴が人を子供  
如く思ッて居アがる、サア来い、老爺、乃公も拂ひをしてやる  
と、懐裡から金を出し、ツイぞ拂ッた事のない權之助が、腹立ち紛  
れに勘定もせず、只何程か掘出して、亭主の前へ投出しました、  
老爺は假令一兩でも二兩でも取得でござりますから、亭主「親方、そ  
れではお預り申して置きます、權之「ム、前の借もある、好いやう  
にして置き、サア来い、互ひに勝負は加茂川の鰐石、彼の側が廣  
くて好い、喜兵「ム、此方は場所のどころは望まぬ、何方なりとも  
好い所へ案内を致せ、權之「オ、来い、と言ひながら、跣足になッて  
飛出しました、有馬喜兵衛も静々と股立を取上げ、下結を取ッ



て禱となし、手拭を疊んで後願巻を致し、追取刀でこの家を立出  
でました、總て側なる鱈石の邊りに参り、支度が好くば何時なり  
とど身構えを致しました、茶屋の亭主は如何なる事に相成るや  
らんと、戦々として慄へながらも見て居ります、手前方の宅に難儀の  
は草履を穿いて出掛けました、亭主旦那様、手前方の宅に難儀の  
いらぬやうに思召して、何處かへ参つて果合をなさいますのは  
宜しうござりますが、片方は在下で聞えた無双の權之助といふ無  
頼漢、若しもの事のござりました時は、矢張り私の方へ何うだ斯  
うだと尻が来ませうと思ひますが、貴郎様方は何方に泊りの旦那  
那様でござりまするか、武藏ア、左様か、斯様な者が當地にあつても  
餘り人に好かれる者ではあるまい亭主へエ、それでござりまするか  
ら、手前の方が迷惑を致します武藏ム、ウ然うか、然らば若しも  
汝の宅に迷惑が懸るやうな事があれば、當地の中老曰井主計と申  
す者方に當時滞在いたして居る宮本、有馬といふ二名の者である

から亭主へエ曰井とは主計の旦那様で、へエ左様でござります  
か、と老爺は言ひながら妙な顔をして逸目散に飛出しました、こ  
れは町奉行の正木の方へ向けて駆着けて行きましたものと見えず  
此方は喜兵衛權之助の兩名でござります、權之、ヤイ素浪人、言つて  
置き、てい事があるから、今の間に言ッ置け、貴様も周防まで命を  
投りに来まいから、親の仇敵といふでもなし、殊に子分の仇とい  
ふは貴様ではない、最う一人の田舎武士だ、汝れは要らざる彌次  
馬に、先へ命を棄てるなら、不惑ながら乃公が及の鎧にしてやる  
遺言があるなら言ッて置け、喜兵衛ハ、ハ、命知らずの馬鹿者とは  
汝の事である、武士に向ッて出鱈目の悪口、其方の遺言を聞いて  
やるといふのが道なれど、貴様のやうな奴には、遺言も何にもあ  
らう道理もない、早く來世へ遣すから、生れ變ッて善い人になれ  
權之、此奴飽くまでも「大いに憤りながら、腰なる無反の一刀  
を抜放し、有馬を望んで真二ツと身構へを致します、折柄權之助



に從ふて居りましたる子分の者等は、これまた駈出しましたるが、  
全く配下の者へ注進をするものと見え、暫時雙方は睨合ふて  
居ます。權之助は喜兵衛、武藏は傍に軍扇を携へ、勝敗如何にと目  
を澄まして見て居りました。何さま喜兵衛は、自分も試して、  
何の位ゐるの腕前といふ事は分つて居りますが、併し此奴も無頼漢  
ながら、可なり武術の道は辨へ居る、無頼の徒の仲間ではこれだ  
け腕が出来たれば、實に吾れより上はないもの。私免許をするも  
道理なり、チヨツと武術の真似方は出来る、併し有馬とは比物に  
はならぬ、今に喜兵衛に真二ツになされるであらうと、肥と様子  
を見居ります。早きことにヤツと言ひさす飛込んで、斬込ひ及の  
を掻潜りその早きこと稲妻の光りの如く「仕たりや喜兵衛」と、  
武藏も膝を打つて賞めました。折柄向ふの當處の奉行正木源右衛  
門にございませす、手下の役人を引連れ、この勝敗をば鎮めんもの  
を上げ、駒を躍らせ駈けて参りました。折柄向ふの當處の奉行正木源右衛

をと出でたりました、時にまた、此方よりは無双の權之助の  
配下の者共、手々に獲物を携へ、凡そ二十五六名、勢ひ込んで駈  
来る有様、正木の背後に引續き、馬に打乗り、鞭を取つて土砂を  
卷上げて出で、相成つたるはこれなん大老曰井主計「この騒ぎ  
に宮本は背後を振向き、武藏有馬や、勝敗半にして間諜突いて居れ  
ばこれにて物分れたから、何うやら在下の奉行が出て参つたやう  
だ」と武藏も不惑には思ひました。其奴を早く斬れといふ掛言  
葉、救けて置いても無益な奴と思ひました。早く有馬喜兵衛、ヤツと一  
てございませす、心得ましたと言ふより早く有馬喜兵衛、ヤツと一  
聲共、打下す太刀風鋭く、さすが無双の權之助も受損じて、鼻  
筋まで斬割られまして、キヤ一ツと言ひながら、血煙立って背後  
の方へ、倒るゝ様を眺めた宮本「天晴れ、大体此奴は素直な奴で、  
賞めました喜兵衛先生、恐れ入りました、大體此奴は素直な奴で、  
身体が柔かいのでございませす、武藏ハ、ハ、ハ、ハ」と笑つて居ります



る所へ、バタクと駈ッて来たが「勝敗は如何相成った」有馬の喜兵衛は「何物も早くも背後に廻し、左の手を大地に突き喜兵衛、馬の役人に候ふか、手前事はこれなる宮本先生の門下に致して、當時白井主計殿許に食客仕る、東國の浪人有馬喜兵衛と申す者でござる、今日當地の野石を見物いたしたく罷越したるところ、彼庭なる茶店にて傍若無人なる事を申し、先生及び私れ等に對し、若て置き難き過言を吐き、口論を仕掛け候ふゆゑ、事程便に取懸めんと存じました、却つて惡口を極め、巴むことを得ず、彼れが言葉は應じ、この處にて毒氣の勝敗を仕り候ふどころ、彼れしく斬込み候ふゆゑ、及物を打ち殺し度戒めんと存じました、此ころ、遊方無頼の曲者、斬棄てあるも苦しからずといへど、其許は白井殿方の食客の者に相違ござらぬか、喜兵衛より候へば申上げません」と言つて居りますところへ、主計は早くも駈

着けて参りました、主計正木、御苦勞ぢやのう、源右「これはお中老でござりまするか、主計如何した宮本武藏、これは叔父上、譯は斯様々々、の次第にて、これ」と言葉短かく申入れますと、主計ム、ウ、左様か取るに足らざる奴、斬棄てるとも苦しからぬ、源右「お中老白井殿が斯く仰せらるゝからは、今は疑ふ所些かもなく、併し白井殿には如何計ひませう」と言つて居ります、折柄、駈參り参つたるは無双權之助の配下の奴、一度ならず二度までも、浪人者の爲めに失敗を取り、「親分の敵、其處動くな」と、子分の奴等、手々に獲物を振りかざし、喜兵衛、武藏を取圍み、右左より暴れかゝりまするを、正木は「コリヤ静まれ曲者共、正木が出張いたして居るぞ、其方の目に、見えぬか、子分正木であらうが、槍であらうが、そんな事に頼着があるものか、最う斯うなれば死物狂ひ、猪武者の吾々、日頃の手並、それにて見物しろ」と言ふより早く、無二無三に暴れ廻るを、宮本、有馬は莞爾と笑ひ「さて、馬鹿者共が



大勢集り、不惑ながら是非に及ばぬ。源右衛門は下役に命じ、片  
傍から召捕らうとする。白井は馬上に大音聲に「主計源右衛門、逃  
げる奴は召捕られよ、向ふ者は捨て置かれよ、三歳の小兒に均し  
き無頼者、看るく、うち死人の山は眼前大丈夫である。源右でも  
……主計イヤサ、彼れ此れ御上で咎めあらば、この白井が申開  
きを致す」と重役の一言に奉行もそこを逃げる奴を召捕れよと、  
下役に下知を致しました。折柄向ふ曲者輩は、縦横無盡に宮本は  
手玉の如くに捉つて投げ、或は打据え足にて蹴飛ばす。古今無双  
の武蔵の手並、看るく、うち氣絶をなし、或は血を吐き、片輪  
となりその場に倒るゝ者七八人、喜兵衛も面白く思ひましたから  
片輪より斬棄て呉れんものと、非常な働きでございます、武蔵  
は聲をかけ、武蔵高の知れたる曲者共必らず斬るナ、及物の汚れ、  
有馬、及物を放して投着けい喜兵衛心得ました」と右と左に組着い  
て来る奴を、一方の者は陰囊を蹴上げ、右より參る奴は、左の手

にて襟髪を掴み、手許に引寄せ、途端の表裏に、一ト振ふッ  
て、聲諸共、向ふの方へ頭顛倒と投着けます、目口より血が出  
て、その儘其處に打倒れ、武蔵暫く見ぬうち中々の手並、  
見事々々、と賞めるうちに、無頼漢の輩は、辟易なし、残り少  
打惱まされ、逃げる者は奉行の手で召捕られ、遂に周防の無頼漢  
は、是にて根絶しをせむばかりになりましてございます、正木保  
右衛門は目前にこの様を見まして、源右天晴れなるどころの兩所の  
腕並、驚き入つたことござる、この上は如何計ひませう、主計  
奉行の手にて召捕りし者は、御貴公の心任せに處置いたすべし、  
この二名の者は、一人は吾等が爲めには骨肉の甥、一人は甥の門  
人に相成つたる事は、確かに白井承知いたして居る、御用もあら  
ば、白井の許へ何時なりとも沙汰あれ、二名とも身が屋敷に仲  
置くであらう、源右左様なれば何分どもに宜しく願ひ申すてござ  
る、主計正木、太儀でござった」とその儘駒の頭を立直し、宮本、



越せばとて、人を殺めた佐々木岸柳、豊夫汝の事を知らぬ事もあ  
るまい、武蔵多分承知を致して居るであらうと心得ます、と申し  
ますると、元の起りは佐々木玄齋岸柳の門人、澤田屋左衛門  
といへる者を手前が目黒に於て斬棄てましてよりの遺恨と思はれ  
ますから主計成程、それはこの中其方話を致した通り、この事を  
兄武右衛門は多分有馬喜兵衛より聞いた事を知らぬまい、武蔵素より  
父は存じますまい、主計然らば一刻も早く當地を出立いたし、佐々  
木の所在を尋ね、速かに仇を報はれよ、武蔵左様ござれば叔父上、  
永らくの間御厄介に相成りましたか、明日は當地を出立仕ること  
に致しませう、主計ア、こればかりは止めることは出来ぬ併し爾も  
仇討の済みたる後は、一ト度は我許へ是非その趣を知らせ呉れよ  
武蔵委細承知仕りませう、主計有馬御身は喜兵衛御意に  
ござります、御名人なる宮本先生、假令岸柳に出逢ひあるとも  
恐るゝ所は露ばかりもこれなく候へど、師弟の約を結びました上

有馬と諸共に、徐々ど自邸へ向けて引取りました、ところ  
翌日に相成り、見ますれば、江戸表より書面が参りました、  
そ披き讀んで見ますれば、案外なるところの文面に、白井主計  
も驚きました、縁談の所は豫ての約束もこれあり候ふゆゑ、  
に於て然るべきやう、本人得心の上なれば致さるべし、去りなが  
ら武蔵の師たる石川群東齋殿儀、肥後熊本の藩士佐々木岸柳  
の爲めに先年極月二十八日、水道橋際にて暗撃に出遣はれ候ふ、  
武蔵幸ひに旅中なれば、飽くまでも佐々木岸柳の居所を相糺し、  
仇を報ひし後は、如何やうも致さるべし、併し仇討の後、小笠原  
家へ仕へるやう云々との事が記してござります、主計宮本、斯様な  
書面が参つた武蔵叔父上、此くの如くにござりますれば、九重ど  
の縁談の儀は、敵を討つての御見合せを願ひます、主計  
何さま、強ひてそれなれば、止める譯にもなるまい、この上は、  
其方の望みに任せん、去りどて何うも今打付けに肥後の熊本へ罷



討 仇 大 島 前 豊 ○--

は、足手纏ひとは存じませぬれど何處までも供を仕りたく存じま  
する主計、それにて白井も大に満足、併し宮本、其方に申して置く  
事がある、本懐を達した後は、切めて有馬は毛利家の臣下と致し  
たいから、左様心得呉れるやう武藏、その儀は委細承知仕りました  
そこで幾許の金子をば兩名に路用として與へ、いよく武藏、喜  
兵衛の兩名は、白井の許をば出立いたしました、これより肥後の  
熊本を志し、一刻も早く彼の地へ罷越し、佐々木岸柳の所在を尋  
ね、何處までも仇を報はんといふの心底より急いで参りましたの  
は、目下の馬關、従前の下之關でございます、どころが山また山  
を越しながら出て参りますと、ブウーッといふ竹法螺の音が致  
しますから喜兵衛先生、何でござりませう武藏、イヤ多分動物でも追  
拂ふ爲めに、獵師の者が打寄つて、竹法螺を吹いて居るのであら  
う喜兵衛左様でござりまするか、こんな處に居て、動物でも飛んで來  
ては面倒ではござりませぬか武藏、イヤ大事ない、糞しんば如何な物

— 討 仇 大 島 前 豊

が來たとて、恐るゝ事はな」と話をして居ります、どころへ  
鐵を擔いで二三の百姓がやつて参りましたから武藏「コリヤ」老  
爺「〇へ、武藏、何ぢや今日はブク」と竹法螺の音が致すが「〇左  
様でござります、今日は小倉の主公様が御出でになりますので、  
修道を致しましたが、またこの頃熊が子を捕られて、氣狂ひのや  
うになつて居りますので、俯しもの事があつた時は、小笠原家に  
濟まぬと、御領主様の御沙汰、それゆゑ悉く在下の者に仰付けら  
れ、彼方此方に手配を致し、竹法螺を吹いて、その熊を追立てし  
居るのでござります武藏「ハ、ア成程、左様か大名といふものは、  
よく行届いたものぢやのウ」〇尤も小笠原様ばかりではござりま  
せん、御當國の主公も一緒に御歸りに相成るんでござります武藏「  
ハ、ア」それでは尙更のこと喜兵衛先生、五万石ぐらゐな大名でも  
大した事をするものでござりますナ武藏「ハ、ハ、ハ、ハ、他愛もない  
事を申すナ、大名の御威勢といふものは、なか／＼ト通りなも



のてない、殊に長府公は五万石でも、御本家は毛利大膳太夫殿、  
そりやア御威勢は鴻大なものだわい」と話をして居ますところ  
へ来た一と言ふ聲と諸共、バタ／＼と百姓共は騒立て、  
片傍の方へ寄つて仕舞ひました、程なく下にくと御先觸の聲が  
聞えましてから、そこで武藏、喜兵衛も、片傍に寄つて居ります  
折柄此方の山の中より、例の氣狂熊と見えまして、矢庭にドシド  
シ飛んで参り、武士衆が立列んで来る所へ、會釋もなく飛込んで  
参りましたから、ソレと言ふなり手ぐに一刀を抜くやら、周章で  
怪我をするやら、その騒動一方なりません、終には乗物もその場  
へ下す事になり、駕籠側の武士は、槍よ刀と薙き渡り騒いで居り  
ます、時に有馬は擔いで居ります木刀を袋より取出し喜兵衛先  
生、手前が武藏有馬やれるか喜兵衛、エ、高が熊ぐらゐ、何程の事が  
ござりませうや、此處でこそ我習ふたるとこの鞍馬の極意」と飛  
來る熊に打つてかゝりました、熊は忽ち有馬の木刀をば啣へ、一

生、懸命に捉まへて放しません、有馬も必死となり、おのれ放せと  
木刀の引張合が始まりました、時に武藏はこの体を眺め、武藏有馬  
鞍馬の極意は如何なつた喜兵衛先生、こりやア堪らぬ、えらい目に  
遭ひました武藏、ハ、ハ、ハ、笑ひながら手許に飛込み、手に持  
てる鐵扇にて、熊の耳の所を發矢とばかりに打ちました、忽ち熊  
はその場に倒れ、起きもやらで血を吐いてブル／＼と身をふるわ  
すかと思へば、その儘息は絶えて仕舞ひました武藏、何うも鞍馬の  
極意も當にならぬナ、喜兵衛先生、恐れ入りました、片傍の茶店へ  
オツと遁入り腰をかけたますと、茶店の者は残らず逃げ仕舞ひ  
誰れ一人も居りませんから、茶を一杯汲む者もございませぬ、武藏  
喜兵衛、必らず共に以後は安りに手出しをするナ、えて過失の出  
來るもであるから、喜兵衛に何うも驚き入りましたることござり  
ます、時に此方の乗物の下りてございましたその内らより御聲の  
かゝりましたものと見え、臣等一同の者、何れも平伏を致し、主



公の御聲のかゝるを相待つて居りますと、静かに戸を開き、主公  
其方が、如何いたした事である、大勢儀に居りながら、僅か一匹  
の熊の身めに、思く舞易を致すとは不都合であらう、甲「ハ、フ、  
恐れ入りましてござります、念掛けなく畜生の暴れ出てまして、  
何うなる事かと思ひました、が、併し彼れなる浪人体の者が、好い  
遊梅に刺留め呉れました、なか／＼容易ならざる手並にござりま  
す、主公「ハ、何處の者か姓名を尋ねて参れ、甲「ハ、フ」と答へて  
近習の一名、茶店へやつて参りました、が、雨人にひかひ、甲「何處  
の方にて、姓名は何といはるか」すると武藏は最と感歎に、武藏  
手前事は浪人宮本武藏と申す者でござります、甲「して此方の方は喜兵  
手にござります、馬喜兵衛と申す者でござりまして、御駕籠側近くお越し  
人にござります、甲「御前御招きに相成れば、御駕籠側近くお越し  
下されたたい、武藏「此は恐れ入つたる事にござります、甲「イヤ、若し  
ござらぬから是非とも、武藏「左様ござらば御免とあつて、武藏、

喜兵衛は袴の脇より手を差入れて土下座を切り御挨拶を致します  
ど、主公は御聲静かに、主公「宮本といふは爾か、喜兵「ハ、フ、主公「僅か一匹の畜生  
の爲めに、臣等の者立騒ぎ、非常に迷惑の場合に、其方兩名にて  
災害を退け、呉れし段神妙の至り、身は毛利甲斐である、過分に存  
ずるぞよ」と御聲が掛りました、兩名は「此は有難き御詮、意、主公  
如何ぢや、予と同道いたさぬか、武藏「過分の思召しにござります、れ  
ど、少と心急ぎにござります、主公「左様か、誰ぞある、依つて便船の都合を致  
非渡りたら存じます、主公「左様か、誰ぞある、依つて便船の都合を致  
小倉へ渡らんければならざるものもある、依つて便船の都合を致  
し取らせよ」との仰せに、ハツと答へて兩名の武家「然らば吾々  
下之關へ御案内を致し、便船の用意を致すでござります、そりや  
ア最う長府の毛利様から便船の用意をして下されまします、船の用意  
此れはございませぬ、そこで兩名の士は下之關に参り、船の用意



を致し、小倉へ渡海の都合を致し呉れました、依つて船宿にては  
格別の扱ひにて、一艘の船を仕立て直さまこれより宮本、有馬を  
小倉へ渡すことに相成りました素より船宿から船宿への引合にな  
りましたことゆゑ小倉の船宿戸倉屋大助方へ着を致しました、二  
人はズイツと船宿へ這入りましますと大助「これはお出で遊ばしませ  
下之關から渡りになりました旦那様御兩名は貴郎方でござりませ  
すか武藏「左様ぢや大助「長府様から仰せになつたそうでござります  
何卒此方へ通ります下されましますやう武藏「これは、お邪魔を致す  
のウ大助「何う仕りました、是非どうかお上り下されませ武藏「許し  
て呉れ」どこれから座敷へ通り、暫時経つと酒肴の用意を致し持  
つて出ました、卒ざ一盞と、兩名に侷めましますと有馬は喜び、大  
宮本に對坐ひにて、一盞催しにかゝりました喜兵「先生、どうも大  
名の御聲掛りといふものは、剛氣なものでござります」武藏「それ  
だから有馬、貴様は先刻も山の途中で申したのは此處ぢや喜兵「どう

も恐れ入りました、ホンに然うでござりますナ」と話をして居る  
折、この戸倉屋の戸外より年齢四十恰好の一人の武士、門人を伴  
れて、供に兩掛を持たせ、ズツと這入つて參りましたが、甲「コリ  
ヤ、未だ船は出ぬか大助「へエ、今少しの間船は出ませんが、そ  
ます、甲「ム、ウ、それでは仕方がない、一盞催して相待たう、そ  
のうちに船も出るだらう大助「何卒お通り下さりませ」そこで件の  
武家は、門人を伴れて、奥室へ通り交するその途端に、片傍にて  
二ツ三ツの下物で、腰を打掛け、一盞飲んで居りました一人の武  
家が居りましたが、何う致しました途端か、這入際に、その武家  
の腰物の下緒が、下に垂れて居りました途端か、這入つた拍子に門入が  
足にて踏み、ガラリと庭へ落しました「イヤ無禮をしたナ」と言  
ひながら、其儘背後を見ずして、ズツと通らうとしましたから  
此方の武家は、その者の刀の鋒を確かと捉へ、乙「其は無禮なる挨拶  
ではないか、武門のならひ、左様な粗忽な事にて、お許し申す事



は相成らぬと引止めましたるが間違ひの基、如何なる椿事の申  
来しますや、一ト息入れて申上げませう。

第 六 回

この時這入りましたる中の重立たる武士、背後を回首り、いま粗  
忽を咎めましたる武士にむかひ申しますには、甲如何にも我門人  
が粗相を致しまして、申譯も無い、何う致したれば御承知下さる  
か、乙イヤ敢て何う致したればといふ譯ではござ  
らぬが、併御身も帯刀をして往來をなさる方なら御承知もあらう  
浪人の魂とすべきもの、小刀は我魂とすべきもの、假令この身は不  
肖なる者と雖も、大劍は父母に傳ふべき大切なるものでござる、  
ッて打落されなば、大劍は拾ひでも下されて、相當なるところの  
の、怪我なら可いわど申して、煙管や扇を落したの

どは事違ひ、御身の不作法でござらう、甲ム、ク、それでは其許  
吾々に無法なる事を言ひかけ、語り金にでもしやうといふ御了簡  
でござるナ、乙此は思ひも依らぬと、この御挨拶、身不肖なれど  
も手前も武士、誤しても盗泉の水を飲まずといふ謔もござる、人  
が日土を疑フても、誤しても仕らうとも、無休なる事を申して、人  
金銀を食るやうな拙者ではござらぬ、然う仰せあれば、身不肖な  
れども、帯刀なして世を渡る者なれば、其劍の勝負を致し、見事無  
禮をして通るだけの腕があらば、横しまに通つて見さつしやい、  
また此方の申する事の理あれば、弓矢入輪照寛あつて、吾れ勝利  
を致すであらうと申しますと、此方の武士は苦笑ひを致しまして  
甲、そりや何でござるか、只今無禮を致した門人に、勝負をせよと  
仰しやるのか、但し此方に勝負をせよと言はつしやるのか、乙、  
く申すからは、此方に勝負はござらぬ、三名御同道であれば  
三名のうち此方に向はうと思はるゝ方を以て勝負を仕らう、甲、



ヤ面白、然らば如何にも掛者が相手を致さう  
常の勝負をさつしやい宿元の亭主は醜の色を變じて、乙左様ならば尋  
なる事に相成るやらんと、實に心配一方ならず、只何事も口の出  
しやうなく、呆然と致して居りました、奥室で一盞催して居りま  
したる武藏、喜兵衛の兩名、見るに見兼ねて武藏は出て参り、武藏  
御兩所、暫時お待ちあれ、物の行違ひといふものにて、騒動にな  
るまじきものでもござらぬが、双方共に當國の方とも見受けられず  
何れも旅先の方ならん、慥く申す吾々も旅先の者、程かになれず  
ば重畳のこと、済むことならば何うか程よく御挨拶を申上げたい  
何うあつても申上げたくは思へども、武士の意氣地、慥く相成りし  
でも何とか申上げたくは思へども、武士の意氣地、慥く相成りし  
からは、お捨置き下され、今は武藏も是非がございせんから、  
當家の迷惑は氣の毒とは思へども、その儘差控へました、此方は  
乙用意が好くば、濱邊へ出さつしやい、甲心得た、と是で双方濱

邊に出で、身支度にかゝり、いよく、双方抜放し、すてに果合と  
いふ事に相成つて参りました、チアこの事を往來人が聞付け或は  
見受け、戸倉屋の濱邊に於て、武士同士が命の取遣だッレ行け見  
に行けと、喧々ど騒出しました、側で居られるものではございま  
せんから、逸か離れて此方から、只喧々と言つて立騒いで居りま  
する、双方は抜連れ、チリ、と手許に寄りました、何程腕  
が勝れて居りましても、毎々同業者の申すやうな工合に、チヤリ  
筋ほどの隙を見て斬合へるもので、受損じるといふ呼吸なものださうで  
ございます、未だ双方に傷も付かざることなれば、及を合はせば  
これまでのこと、是にて仲裁をするこそ好けれど、武藏は双方の  
真正中に這入り、武藏各々、先刻挨拶を申した時は御承知はなかつ  
たが、互ひに魂を抜連れ、一ト太刀にても打合はせられた、これ



で御會得が參つたでござらう、なんと箱に納めて、此方の云ふ事を  
を肯いては下さるまいか」すると双方共に「如何にも御身の仰せ  
の通り、敢て命までも取らねばならぬといふ程の遺恨のあるとい  
ふ譯でもござらぬから、先方が得心とあれば、此方も」ど一方が  
申せば、此方もその通り得心をいたしましたから武藏「それで元  
倉屋へお歸りあつて、機嫌よく一献酌交し、お別れ下さる譯には  
參りませぬまいか兩人實に挨拶は時の氏神とやら、然らば御貴殿の  
仰せに従ひ、戸倉屋へ立歸るでござらう」と漸く双方は打觸けを  
した、見て居りました見物の輩は「何の事だエ、双方共に刀を合は  
すかと思へば挨拶が這入つて双方に分れ、容易く箱に納めるやう  
な事ならえらさうな事を言はねば好いに」と笑ふ者もございます  
また中に心あるべき者は「武士といふ者は、如彼せんければなら  
ぬものかと言ふ仁もあり、噂區々喧々言つて、皆々はそれ引

取ることに成りましたが、武藏は兩人を同道して、戸倉屋へ戻つ  
て参りますると、大助は表の戸を鎖めて開けません武藏「コリヤ、  
開けて呉れ、ア、和解ぢや大助「旦那様、喧嘩は済みましてござり  
ますか武藏「ア、無事に納まつた大助「尚し開けまして、私共の宅で  
騒動がありましては武藏「イヤ決してその心配には及ばぬ、安心い  
たせ大助「有難うござります、イヤ最う先程のお勢ひでは、すてに  
私の宅の身上は潰れるかと思つて、喫驚いたしました事ではござり  
ます」と言ひながら、恐る／＼表戸を開けますると、武藏は二人  
の真中に立って、ズイツと宅内へ這入りました、有馬喜兵衛は此  
方に控へて様子を見て居ります「マア此方へ」と奥の室へ兩名を  
同道して、席を分けて真中に武藏は坐を占め武藏「喜兵衛「ハイ  
武藏「酒肴の用意をして出して貰うて呉れ喜兵衛「心得ました……オ  
イ老爺「サア、心配せず酒肴の用意をして持つて來い大助「畏ま  
りました」と老爺はその都合にかゝりました、待てば程なく料理



が其處へ出まして、互ひに盃をさし、是にて物を圓く納めにか  
りました時武藏は「斯く申する拙者は姓名を打明けまするが、御  
貴殿等の何うか御姓名をば承りたい」すると此方の武士は「乙誠  
に思ひも依らざる御厄介に相成り、有難う存じます、拙者事は語  
るも最とぞ恥かしながら、實は大和國正木阪の館持、柳生飛騨守  
殿元家來當時浪人渡邊久藏保といふ者でござる、酒の爲めに主人  
の御憤怒を蒙り、當分修行の爲めとて、浪人を致して斯かる仕合  
せでござる、誠に面目次第もなさことで、武藏左様でござるか、  
の、高い柳生大先生の御門弟でござつたか、イヤ御浪人をすれば、  
是非もない事とてござる、して其許様は「甲ア、拙者事は肥後國熊  
本に住ひ、道場を開き居る、佐々木玄齋岸柳といへる者でござ  
る、武藏ナニ、そりや其許が岸柳とよナ岸柳も見知り置かれて、以  
後には心安く願ひます、武藏此は怪しからぬことなり、岸柳とあれ  
ば、此方にて心安くは致し兼ねる、岸柳ム、ウ、とは何ゆゑに

武藏「拙者事は江戸小石川自由に於き道場を開いたる石川群東齋  
殿流が門人前名赤松武藏、當時宮本武藏と申す者でござる、岸柳ム、  
ワ、ナニ御身が宮本武藏とナ、武藏師匠の敵の佐々木岸柳、この上  
は卒さ尋常の勝負をいたせ、柳ム、御身が師匠の仇敵とあれば  
吾れに取つては其許こそ門人の仇なり言ふまでもなく勝敗を住ら  
う、武藏「卒さ岸柳「卒さ」とすでにこの場は於て起上らんす有様で  
さいますから、驚いたのは戸倉屋大助「今日は如何なる悪日ぞ、  
再び武士の喧嘩が始まり如何したら好からう」と實に心配一方を  
らぬこととてございます、この時渡邊久藏は「何さま兩先生、手前  
の事より斯かる間違ひを惹出し、實にこの場で勝負にも相成るこ  
とでござるが只今の御様子には、佐々木先生には門人の仇だと申  
され、また宮本先生には師匠の仇だと申され、仇敵をいふ事  
に相成れば、こりやア私事ではござりませぬ、いから、幸ひ當地も大名  
の御下なれば、天領とは事變り、代官なきに届出づるとは違ひ、



一國主に願ひ出したれば何とかまた工夫もあらうかのやうに心得ま  
すから、双方ともこの事を上へ御願ひあつて、君父の仇は俱に天  
を戴かず、互ひに勝負を致されれば如何でござらう岸柳、イヤ何  
さま波邊氏の言はるゝ通り、宮本此方は浪人でござるが、肥後熊  
本加藤肥後守忠殿より、些少ながら扶持をされ、藩中の人々に  
指南を致して居ることゆゑ往來の行合ひ喧嘩の如く、仇よ敵と  
ばゝれて、勝負をする限りには、見苦なき果合は致し度ない武蔵何  
さま、御身の言はるゝ通り、拙者も當浪人なれど、父は大小大名  
より扶持せられ居る者ゆゑ、手前とてもその如く、双方共に國主  
へ願ひ出て、尋常の勝負を致さん岸柳、それこそ互ひに望むところな  
り、東齋を殺害に及びましたるその譯と申しますから如何いふ譯と  
と辨じ置さませう、これは些かお話がございませう、彼

の肥後國熊本の町人、澤田屋左衛門と申す酒屋の亭主が、江戸  
表罷越し、道場を開きまして、無敵流十八番と、堂々たる看板を  
掲げ、石川殿流先生の向ふを張りにかゝりました、この時石川の  
門人梅津賢次郎といへる者が参りました、却つて遺恨立て歸り  
その後宮本が未だ赤松武蔵と申した頃ほひ、恥辱を雪がん心より  
先方の道場にて非常なるところの働さを見せ、大いに先方の者が  
恥入り道場を開いて居るなら、然し澤田屋左衛門なら左衛門と記  
して道場を開いて居るなら、然し澤田屋左衛門なら左衛門と記  
が、佐々木岸柳と立派に看板に師の名前を記したるがゆゑ、面  
うて居られぬどころから、武蔵の武蔵を附狙ひ、目黒の森様の御  
屋敷から歸途にて待伏を致して、門人共と諸共に武蔵の一命を取  
らんとし、却つてその場を棄斬てられ相果てたる事は、委しく  
述べて置きました、却つてその場を棄斬てられ相果てたる事は、委しく  
にて、加藤肥後守忠殿の供を致して、江戸表を浪人いたしました後



見ますると、目黒に於て自分の門人澤田屋左衛門が、石川殿流の門人赤松武藏といへる者に撃たれ相果てたといふ事を聞き、無念やも方なくそこを尋ね見れば、それは宮本武右衛門の梓に致して、宮本武藏と相名乗り、天晴れなる達人にて、すでに目黒の森殿方に於ても、武術の顯妙をあらはしたるなどいふ、その噂、區々にして、なか／＼若手の達人と承りましたが、そのやれ江戸に居るならば、門人の仇、何とか致して報うて呉れむ」とは思ひ居りましたが、何分にも本人が江戸に居りませぬことゆゑ、何とも致方なくこれといふのも、石川殿流の吩咐けならんと邪推を致し、そこで石川殿流の許へ参つて、案内を乞ひ、岸柳手前事は肥後熊本に住す佐々木玄東齋岸柳と申す者でござる、御身が門人に宮本武藏とやら申す者が之ある由是非面會を致したいと申し入れますと、石川殿流は佐々木にむかひ、殿流舟折と諒ぬ下されたなれど、その赤松武藏事は江戸表をば浪人仕り、何處を當

と定めなく立退きましたことゆゑ、當時は江戸に居りませぬ、伊し貴下の御門人なる方を殺害に及んだといふ御立腹はこれあるかなれど、それは吾れ等の知らざること、この邊の所は恐しからず思召し下されたい、と石川先生のことゆゑ、物縁に挨拶を致しました、佐々木は望む敵が江戸に居らぬといふのを、強ひて何う斯うとも言ひ悪うございますから、岸柳左様ならば手紙も今日は何名かの門人を伴れて参つたることゆゑ、幸ひに種古田とあらば、何うか一本と手合せせなると願うて歸りたい、殿流その儘なれば是非もござらぬから、手前の方も門人を以て一本の試合はさせ申しませう、岸柳「何うか頼む」とあり、石川殿流の門人に何れ程の奴があるか、腕を試して見たいと思ひますから、幸ひ伴れて参つた須田軍平が出で、石川の門人内田孫九郎といへる者と、山田平藏といへる者を根手に出しましたが、須田は二人の者に勝利を得ました、その時石川先生の門人水戸公の番士辻文次郎といへる仁が出



でまして、一本の下に須田軍平を打据えましたから、そこで須田の兄弟が子、すなはち佐々木の門人安田彦八が出て、辻と立合ひました。これまた小兒の弄られる如くに打負けました。見象ねましたから佐々木岸柳は「イヤ何うも中々の手並、この上は玄東齋一本と相手を申す文次、此は恐れ入りましてござり岸柳卒ざ」とあつて岸柳起上りしました。辻は身構へを致して立向ひました。ところが成程どうもよく使ひます、稍々暫時の間打合うて居ります。うちに、七分三分の懸隔で、遂に辻は打負けました。そこで何卒先生にも一本願ひたいとのこと、石川嚴流も今更辭退もなり兼ねまして嚴流左様ござらば未熟ながら老老老の嚴流と相手を仕る」として石川詳東齋はそれへ支度をして立出でました。佐々木もこの老老は前名石川紋彌と申し、戸田彌六左衛門先生の門人にして、悔り難き老老なりと思ひますから、なか／＼油断は致しません、此處でこそ我々義を極めし燕飛の太刀を用ゐる所なり

と、心中に考へ、隙なく打込んで参りましたが、石川詳東齋は程よくあしらひ、一本肩を打たせ嚴流「降参た」と聲をかけました。嚴流「イヤ流石は肥後の熊本に道場を開かれ、武名を天下に轟かす、佐々木玄東齋先生、驚き入つたること、今では眞の勝負ではござるまきの遠く及ばざること、岸柳「イヤ／＼」只今は眞の勝負ではござるまいから、いま一本眞味の所を、見せ下されたい嚴流「イヤ／＼」何度参らばとて、逆もこの老老が、血氣の其許に向つては、及ばざること、ござる、勝敗は一度に止まること、眞劍なれば身が命はござらぬ、斯かる腕前なればこそ、加藤忠廣公が扶持せられ町道場を開かる、其許に、御藩の方を稽古にお遣しになるは道理にこそ聞えます、勝敗はこれにて相分りました岸柳「然らば只今のは眞の勝敗でござつたナ、嚴流「如何にも岸柳「ア、只残念なは宮本の居らざること、併し居らぬ者を何時まで彼れ此れ申して居つても無益、お邪魔を仕つたサア須田、安田、同道いたさう」と暇を告げ



て立歸りました、その途次も話を致しませぬには、軍平「なんと先生  
驚き入ッたる腕並、彼の石川の老翁老爺も、あなたには遠く及  
ばず、この上は一ツ近き所に家を借り、住居なされては如何で  
岸柳方々、其許等は御承知あるまいが、彼の老爺は拙者に負けた  
のではない、花を持たして勝たしたのは、流石は老練だ、吾れか  
ら見れば遙かに藝は上である」そりやア佐々木も出来る仁でござ  
いますから、よく分ッて居ります、須田や安田如き者では分りま  
せんが、岸柳容易ならざる老翁老爺、腹のうちで笑はれることの無  
念さよ、併し奎左衛門をば弄物にしたかと思へば、宮本とか赤松  
とかいふ其奴こそ忌々しき奴彦八先生、赤松も唐松もあつたこと  
はござりせん、澤田屋奎左衛門が居られたところのその町内に  
假令僅かなうちにも宅を設けて住居を致されては如何でござり  
ます、岸柳「、イヤその儀は此方にも心得て居らぬでもない」と  
これから元澤田屋奎左衛門が居りましたる町内に、醫者の住みま

した明家がございます、これを借受けまして、普請をさせ、道場  
を開き、戸外に無敵流十八番、肥後熊本の住人佐々木玄東、岸柳  
と記し、立派に看板を掲げました、誰れ一人も門人は来ません  
只日々通ふのは、當時江戸表に滞在を致して居ります加藤忠廣殿  
の家来ばかり、すると町人は戸外に立ッて「ヤアこの處は岸柳の  
突合るところ、併し如何な事をしたッて、石川先生の片足にも足  
りやアしまい」と色々雑多な噂をして行く者がございます、とこ  
ろが或日須田は道場を出まして、用を達して戻らうと致します  
と、途中で以て町人が噂を致して居りますを聞きませすと「オイ  
彼の小石川に佐々木といふ者が道場を開いたナ、彼の看板は彼  
やア顧客者の看板か薬屋の看板か、何だか戸外に立派な看板を掲  
げてあるが、一人も習ふ人が来ないといふ、野方迄もない、向ふ  
に石川殿流といふ先生があるのに、此方に佐々木岸柳とは如何い  
ふ譯だ、△チア彼れは眼醫者か何かで岸柳の岸字なら眼といふ字



を書く方が好からう馬鹿な奴もあればあるものだ、向ふに堂々たる先生が居なさるのに、篋棒に長い名前を書いて、他愛もない事をするちやアないか、肥後の熊本三界から、この江戸表に恥辱を晒しに来たのか、イヤサ聞け、この前のナ話を聞いて見れば、道場を開いた佐々木岸柳といふ奴は、肥後の熊本の酒屋の老爺だといふ事だ、宅に坐って居て酒を送らしてゐりやア、命に別條はないものを、少しばかり剣術の真似事をする爲めに、江戸まで出て来て、馬鹿な真似をして、倒頭目黒で石川先生の門人宮本さんに殺されて仕舞ひ、それが無念だと言つて、這回は彼んな事をしたさうだが、また彼奴も今に殺されるだらう、○サア、そんな事かも知れない、とツイ、噂をして行くを聞いて、無念やる方なく思ひながら須田は立歸り、この事を佐々木に話しなすと、是にて岸柳はいよく、以て我慢が出来ず、直にその家を閉んで仕舞ひ、加藤家の邸内に隠れました、この屋敷は近頃の井伊様の屋敷

の處で、彼の櫻田にございます、彼れはその以前は加藤肥後守の屋敷でございました、この屋敷内に潜んで居りましたが、残念無念やる方なく、彼の老老老爺め、我門人といひ吾れといひ馬鹿にしをったかと、いよく、これから石川群東齋を狙ふ了簡になりました。

第七回

お話替つてこの事が追々評判になり、石川は頗るしい先生である熊本から参つた佐々木に花を持たせ遣し、勇に誇らず武に慢じず彼れが眞の劍客者なりと、深く感心しなされたのは、彼の柳生但馬守殿でございます「ア、吾れ等も思へば若年の頃は、千辛萬苦して、美濃の國に於て野村先生の許に朝夕の糧の拵へをなし、その後辛苦を嘗めた末、始めて小田原に於き、上泉先生の姿を見て跡を慕うて上州箕輪に参り血の涙をこぼして、苦しんだる事が



ある、その節上泉先生に異見をしられた事もあるが、誠や石川は  
真個の劍客者であるわい」と頻りに慕はしく思召したゆゑ、或日  
のこゝに但馬守殿は石川殿流に寸暇なれば出で下されといふ使者  
を遣はされた、此方は殿流、柳生但馬守殿の使者ゆゑ、早速  
出掛けて参りますると、「今日は幸ひ御上の御用もこれなきゆゑ、  
貴所と往昔の物語も致したく、到来物もこれあれば、一盞酌んで  
面白く話を致さうと存じて、招き申した、緩々か遊んで呉  
れるやう」とのこと、殿流も相手は柳生公、當時將軍家の御手を  
取つて御指南をなさる飛彈殿が父御、そこで何呉れと話を致され  
ます、何方も武藝には艱難をせられた御仁、自分も蝦蟇ヶ峰戸  
田彌六左衛門の門人にして、紋彌の昔し、田宮と諸共に憂難と  
して、福島正則が家来大膳、彌正を三原に於て討取り、その後  
子息戸田新八郎殿は加賀へ仕へられ、田宮左金吾は豊前の國に道  
場を開き、吾れは江戸の地に参つて艱難の末、小石川に道場を開

いたるまでの話を致します、また柳生侯は柳生侯で、若年の頃松  
室内膳の爲めに艱難をして仇を報ひたるころの話などをば致され  
るうちに、はや追々冬の日も暮れて参り、夜に入りましてござ  
いますから殿流ア、思はぬとで時を移し、非常に長座を仕り、柳  
生先生、最早御免を蒙ることでござります、但馬これは石川氏、あ  
招き申したに、何の甲斐もなく、今宵は拙者方で一泊いたされ明  
朝、歸られても遅かるまじ、別に勤むる主人もなき御身ゆゑ泊り  
なされては」と強ひて止めて下されましたが殿流「イエ、然うて  
ござりませぬ」と強つて、歸らんと言ひますから、但馬左様なれ  
ば誰れか一人送らせませう、殿流「イヤその儀は決して御心配には及  
びませぬ、但馬然うではござらぬ、仲間提灯の用意を致させい、  
家来ハ、ッ、心得ました、但馬鹽田傳藏は居らぬか傳藏ハ、ッ、但馬」  
汝石川先生を小石川まで送り申せ、殿流「此は柳生先生、恐れ入り  
ますことで、但馬イヤ是非ともお伴れ召され殿流ハ、ッ、左まで」



仰せのござりませれば御門人といひ御家來までお借り申します、  
但馬「サア」遠慮なく」と是にて二蓋笠の定紋の付きましたる、提  
灯を點し、中間六助は先に立ち、鹽田傳藏は石川先生の背後に從  
ひ、木挽町五丁目の柳生公お屋敷を出まして、塩田と話をしながら  
ら、遂に小石川の方へ戻つて参りました、時は極月二十八日、折  
柄「ボ」霞を催して來ました嚴流ア、寒いウ傳藏先生、今晩  
は取分けひどうござります」と懸て小石川水道橋の近邊まで戻つ  
て参りますれば、片傍の淋しき所より、ヤツとかけたるヤ聲諸共  
抜打ちに斬付けました、先に持つて居りましたる二蓋笠の紋の付  
きある提燈を真二ツに斬りましたから、中間は膽を潰して、その  
まゝ其處へ控と腰を抜かして打倒れましたから、猪牙才なり加勢をす  
流、身構へを致しますところを、先は拜打ちに思ひ知れよと斬  
込む刃、心得たりと抜合はせ、二打ち三打ち打合ふうちに此處で  
塩田が真個の確かな者なれば、直さま抜連れ加勢をすべきところ

でござりますが、如何なる所以にや、背後へ退りましたが、身構  
へをしにかゝらうとしますと、先の曲者「猪牙才」なり加勢をす  
るか汝れ」と横に拂うて來る時に、鹽田は体を躲さんとして、石  
に躓き打倒れたるまゝ、何處へか逃出して仕舞ひました、氣の毒  
やそのうちに石川先生酷酔をして居られました情けなさに腕に抜れ  
はなくとも、足が自由にもどりませんから、そのまゝ其處へ斬棄  
てられましたが、誠に氣の毒なる事にございます、先の曲者は二  
刺し三刺し刺貫し置いたなり、何處ともなく逃去りました、鹽朝  
に相成り、この事知れるや否、鹽田傳藏は中間に口止めをして置  
きましたけれども、中間は如何にも不甲斐ない鹽田と思ひました  
が、遂に鹽田の事を、主人但馬守へ話を申上げましたので、柳生  
公は以ての外のお怒り、鹽田は永く勘當とされ、遂に江戸表に止  
まり兼ね、浪人をして、覺えた事もございませんから、田舎で麥  
飯を喫ひながら、劍術を致へて廻りましたが、併しこの男も、可



なり腕も出来ましたから、豊田流といふ流義をのこし、豊田喜  
兵衛と名前を改へましたが、後に我身を悔いて、天晴れなる武士  
となりましたから、解原式部大輔忠次殿へ仕官を致しましたが、  
それは後の事、但馬殿は何さま石川を撃しは、憎き由者と、草  
を分けて御時宗になりましたが、撃つたるは多分佐々木玄東、草  
御といへる者であらうと御氣が付きました、何分にも肥後守忠  
貞殿の御分に遺囑を聞き居て、大小の扶持をして居られる者と聞  
きますから、これ御生儀は違ないことゆゑ、如何する事にも行  
きません、武右衛門にして見ますと、自分の情の武蔵の師匠で  
さいますから、能くまでもこの事を取組し、合志殿の公の家来で  
あらうとも何であらうとも、情の爲めには師匠の仇敵と充分に手  
を入れ、取組して見ますと、いよく早瀬に逢ひな事と誰か  
めましたから、そこで速回、時宗の御より手紙が参りましたは、つ  
印井井計の許へこの事を知らしたのでございませす、さて早瀬はと

の後江戸表を叩いたしまして加藤忠貞殿より先は肥後の熊本へ  
立歸り、松尾らぞ熊本にて我軍毒に居りましたが、何となくまたる  
く思ひ、石川の門人宮本武蔵といへる者あり、此奴なかく武蔵に  
秀で必定石川の事を知らば、吾れを仇敵と認むに相違ない、休  
てこの武蔵をば撃棄て、了はぬ以上は、枕を高くして寝られぬ、  
一ト先づ肥後を出で、速回には武蔵といへる者が、旅修行に出で、  
居るこそ幸ひ、此奴に面會をなし、それとなく誘出して、何處で  
なりと撃取つて了はんといふ心底より、遂に須田、安田の兩人を  
引伴れ、小倉へ出て参りましたが、聞らすも宮本武蔵に出逢ひま  
したのには、前回に申しました戸倉屋大助方の手違ひに就てござい  
す、是にて武蔵は始めて岸柳といふ事を知りましたから、我てよ  
り師匠の間の情を以て、武蔵は敵を討たんど思ひ居ります折柄  
此方は壺左衛門の仇といひ互ひに相争ひになりましたから、そこ  
で渡邊は、「これより小倉の奉行所へ掛者が参つてこの趣を願はん」



とありそこで双方ともに渡邊の返事を待って勝負を致さんといふ  
事に一決致しました、この時渡邊久蔵は「當家の亭主大助へエ久蔵」  
チヨツとこれへ来て呉れ大助へエ、参りたうはござりますが、抜  
けましてござります、久蔵「抜けたとは何が 大助へエ腰が久蔵役に立  
たぬ奴ぢや 大助」役に立たぬのは構ひませんが腰の立ちませぬのが  
悲しうござります、久蔵ハ、ハ、ハ、町人は慥くもあるべきもの  
か、然らば此方が其處へ参る」有馬喜兵衛は俯し岸柳が宮本先生  
に斬付ける事あらば、此方立所に二人の門人めをば、右左に打斬  
つて呉れんと、油断なく目を配つて居ります、佐々木もまた然  
る卑怯の者でありませぬから、少しも左様な事は致しません、只  
渡邊の返事を待ちその上にて勝負をせんと、決心をして居ります  
から、大丈夫に体を固めて、油断なく坐して居ります、ところが  
此方は久蔵でござります、久蔵大助大助へエ久蔵當處の奉行は何と  
云はるゝか 大助多良尾右近様と申します、久蔵ム、左様か、何う

れば奉行所へ行ける 大助へエ、それはこの道を斯うも出でなさい  
まして、斯う行つたところが奉行屋敷でござります、久蔵ム、ウ然  
うか、然らば此方参るが、當地の勝手も不案内なれば、誰れか案  
内をさして呉れ」是にて下女に案内をさせまして、奉行多良尾の  
許へ参りました、ところが門前にて案内の者は還し、自分一人門  
内へ這入り、玄關にかゝつて久蔵御免下さい、手前は天下無敵の  
浪人、渡邊久蔵と申し、柳生流の武術を以て、諸國を修行仕つる  
者でござる、少と今日途中にて出逢ひ候ふところの仁が、仇討の  
事が出来たいし、それが爲めに願ひ申上げたいから御面會を願  
ひたい」と申入れました、そこで執次は「开は容易ならぬ事であ  
る」ど早速奉行へ申入れます、「兎に角通すが好い、面會をしや  
う」どあつて早速渡邊に面會を致し、一々の話に聞きますと、  
落なく前條の次第を物語りました、そこで多良尾は驚きました、  
此は容易ならざることゆゑ、我一存を以て事を計ふといふ譯にも



舞らす、一階は主公に託し、いたまんければならぬ、兎も角手前屋  
敷に於て、暫時密へ下されたい」と渡邊を待たせ置き、これか  
ら直ちに御上へ出で、主人小笠原大膳太夫殿へ、右の趣を言上  
に及びました、そこで主公は「宮本武蔵の地へ歸つて、その身  
の歸たる石川藤左衛門の仇を報はん」とあるなれば、何卒いたして報  
はせたく、この密一報、一外ならざることをゆえ、其方歸つてよくよ  
く武蔵に取取り、その上の計ひに致すが宜しからう」との御せに  
右近委細承知いたしました」とあつて、多良尾右近は御説を運  
り、屋敷に歸つて、渡邊大膳を先に返し、早急戸倉屋へ歸  
り、早急に取つて、武蔵に面會を致しまして、事柄を逐一に取取り、ま  
な厚御にも合ふてその事を聞き、兩名兼戸倉屋に寄め置き、尤も  
居室は分けて置きます、密中より徒士越前守の密をば呼寄せて、  
及前守の密をさそ置き、早急長府へ向けて渡り、右近は長府の毛利  
甲斐殿へこの事をば報入れました、と云ふ所が毛利甲斐殿より

御本家毛利大膳太夫殿へ歸ひました、遂て曰井主計より聞き及べ  
こどもございますから「是非ともは返向は仇を報はせてやるが好  
からう、これ小笠原殿ばかり心配させべき事でないから、武蔵  
なる者は密中曰井主計の密に相當るべき者、また武蔵が父の  
宮本武右衛門なる者は、小笠原家に扶持せられて居る者、密つて  
小笠原と毛利とは、何うして見ても密で置き難いから、こりや密  
と取調べた上、仇を報はせてやる方が宜しからうと、小倉の奉行  
多良尾右近に向けて、宜しく密を述べ、此方より手数は及ぶであ  
らうと申し置け、このこと、そこで長府の使者は立歸りまして  
多良尾右近を先へ遣し置き、長州公より小倉領へ渡つて、武蔵  
原柳双方へ番を付け置きました、戸倉屋の宅は大騒動でございま  
す、併し小倉小笠原家に於きまして、宮本武右衛門は密で扶持  
を致してあることゆえ、長州公のみは密合をさせるといふ譯にも  
行きませず、先づ原柳に面會をして取調べて見やうと、これから



小倉藩のうちに重役を以て岸柳を呼出し尋ねにりました重役其方より浪人にして、熊本に道場を開いて居る者か、但し肥後守忠秀殿より、食祿でも戴いて居る者か、如何である岸柳御意にござります、手前は浪人にて道場を開き、その實忠廣公より藩中の方々に指南を致し呉れよとの仰せに依って、十人扶持を頂戴いたし居る者でござります、重役それは忠廣殿直接に下し置かれたものであるか岸柳ハ、ツ、開は左にあらす、正敷肥後守殿に於て、御存じなき事もこれあるまいとは存じます、實は御家老飯田豊前殿よりの思召しに依って、戴いて居ることにはござります、重役ウ、ム、左様か、然らば一應熊本へ届けんければならぬ、先づそれまでのうちには、宿元にて沙汰を相待つやうと申し聞け置き、これか、直さま重役は主公へこの趣を申上げますと、直に小笠原家より加藤忠廣公へ右の趣を届けに及びました、この時家老の飯田豊前は三万石を戴き、五十四万石が表高でござります、この時家老の飯田

十萬石も上る肥後の熊本、その加藤家の政治は、自分の掌中に握り、自由自在にしやうといふ位な慾心の深い飯田豊前でございます、この豊前は親父の加藤十虎の勇士飯田角兵衛の弟飯田左馬助といひし者でございます、飯田左馬助は老年ゆゑ世に通りませたんだが、加藤家に於て名のあるところの木村主計、荒川熊藏の如き人々は、皆豊臣の恩義を忘れず、主君忠廣殿に逆らひ、慶元兩度の合戦に、大阪へ入城を致して仕舞ひました、依ってその後國にこれぞといふ仁がございませぬから、今は己の心の儘に致して居りますし、大体豊前は強情我慢の質にて、殊に奸佞の者ゆゑ主君に取り入り、忠廣御寵愛をなさるを好しとして、機會を見合はせ、主家も横領せんといふ位な、ひどい根性の飯田ゆゑ、他くまでも岸柳をば己の懐刀にでも使はんど、假令十人扶持でも與へ日頃寵愛いたして居ります、その岸柳を、這回仇をば報はすの敵討をさすのといふ事を申込んだのでござります、小笠原は假







致し、僅か十人扶持ぐらゐなものを遣しあればとて、公けにこれを遣し、敢て熊本の指南番をさせて居るといふにもあらず、町道場を開いて、藩中の者が稽古に参るとて、畢竟私事、また飯田豊前と申す老職の者が、十人扶持を興へて居るとのことなれば、これ忠廣自から興へて居るといふにもあらず、これとても公けにすべきことでない、それに何ぞや、熊本領に引いて、我目前に於き、勝負をさせんなどは、必定豊前なる者邪説を吐き、忠廣籠絡するがゆゑ、熊本藩中の者に加勢を出し、宮本をなきものにせんといふ謀計でこそ、左様な事を申す者である、誰そあるか、この事を篤と評定の上にて、確かな者を加藤家へ差向けるが宜らうとの仰せ、委細長まりました、先づ福原、宍戸、増田、目黒、伊原なにてと城中に集りました、先づ福原、宍戸、増田、目黒、伊原などいふ名代の御家老方ばかり打寄りまして、種々様々に評議の末、「假令加藤家何程の威勢を奮はんと致すとも、當方に於ても理

屈もこれあることゆゑ、此方から確かな者を遣せば、論には勝つであらうけれども、加藤家も名家である、當今の忠廣殿は兎もあれ、先代清正公は、豊臣方に於て、世にも有名なる智仁勇の三徳を兼備し、一社の神にも仰がれしほどの仁ゆゑ、加藤家に傷の付くやうなことをしては宜しくないから、誰れを遣したら宜からうとの評定に、この時福原越後進出でまして、越後この儀は中老臼井主計を遣す方宜しからう、皆々「何さま、福原氏の言はるゝところ至極御有理、臼井は宮本の縁者でもあり、正敷引氣を取るやうな事もありません、臼井は宮本の縁者でもあり、正敷引氣を取るやうな事でもありません、成程この方なれば至極宜しからん」と是にて臼井主計を呼出して、云々の趣を傳へました、すると老年ではございませうが、至って氣性の強い仁ゆゑ「手前参つて速かに熊本家に掛合申さん」とあり、升何分ともに其計の力のあらん限り掛合して参られよ、主計「心得ました」と別段何の指圖もなく、只臼井の一了簡に任して遣しになりました、依つて臼井主計は支度を致して、肥



後の熊本へ参ることに成りなした、さて長州領に於ては、長府  
甲斐守殿を始めとし、また豊前小倉小笠原殿を始めとし、皆如何  
なることに相成らんと、熊本の便りを相待ち居ります、曰井主  
計は日を経て肥後の熊本へ参り、早速旅宿を取りまして、翌日城  
内へ参り、それ／＼手続きを経て、御上へ向けて御目通を願出し  
ました、すると忠廣は家老の飯田豊前を呼びまして、主公其方長州  
の使者に會うて、如何やうも存寄りだけの答へを致せ、豊前心得  
ましてござります、と豊前は曰井主計に面會を致しましたが、如  
何なる者かと眺めて見れば、老年ではございませぬ、なか／＼勇  
氣凛々としたるところの曰井主計面會の上、主計手前事は毛利大膳  
大夫が家來、曰井主計と申し身不肖なれども中老の役を相勤むる  
者、ござる、豊前左様か、手前事は加藤家の老職、飯田豊前と申す  
る者、這回は遠路のところ、御苦勞に存ずる、併し使者の趣を承ら  
ん、主計、然ればでござる、這回佐々木岸柳、宮本武藏、仇討一條につ

き、肥後の國より豊前小倉へ相渡るや否、斯く／＼の間違ひの出  
來し事より、互ひに師の仇門人の仇と言争ひになりましてござる  
この出來事は畢竟豊前小倉に於てのことなれば、只熊本公に於て  
は、岸柳は當地に於て扶持いたしある者ゆゑ、當地に引いて仇を  
報はせんどの趣き、小笠原家より承りました、また武藏を呼寄せ  
小笠原家に於て尋ねられしところ、手前は師の仇敵とあれば、江  
戸表に引いて仇を報ふべきが道でござるが、遠路のところ、別段  
江戸表まで引寄せ、或は出張るにも及ばざること、畢竟小倉に於  
て出會ひたる事なれば、御領分のうち何處かの地を借用いたし、  
その場にて運を天に任して勝敗をいたしたいたいの儀、これ當然の  
ことなれば、有理に相聞え候ふ、然るに御當家に於ては、何等の  
爲めに熊本領へ引いて仇を報はさんければならぬと言はるゝか、  
これ甚だその意を得ず、豊前それは當地に於て扶持いたしあるべき  
佐々木岸柳でござる、主計ではござるか、扶持いたしある佐々木岸



柳と申さるゝが、何日頃より扶持をいたされたこととござる。豊前  
サア………とこの一點で豊前も窮へました、三年も五年も前から扶  
持をして居る者どあれば、武藏の師匠を殺したる佐々木玄東齋を  
承知して以てこれまで捨て置いたか、江戸表に於ては、將軍御指南  
番たる柳生侯より、それ〱骨を折つて取調べられた時、佐々木玄  
東齋は逐電をして仕舞ひ、居らざる趣を加藤家に於て答へて居り  
ますから、今更承知して國許に置いてあるとも云へませんので  
豊前近頃参つて當地に道場を開き住して居る者なれば、彼れが  
武術は類稀れなるものゆゑ、熊本でも數多の門人もあること、依  
つて當地に引寄せ討たしたれば、それ〱門人共にも別れを告げ  
て、心残さず勝敗を致さんかと存するゆゑ、畢竟熊本領へ引寄せ  
別れを告げさせ、仇を報はせ、また本人先方を反撃にするや、そ  
の邊の勝敗は時の運に任せるのみのこと、只岸柳が心残りのなき  
やうにと思ふばかりで此方は申したることとござる。主計それは甚

だその意を得ぬことで、岸柳は熊本に道場を開き、門人數多これ  
あり候へばそれ等の者に名残を惜しんで、別れを告げさせたいと  
仰せあれば、宮本は幼稚の砌りより、馴染んだるところの弟子兄  
弟も數多あり、何程か江戸表の事が懸しければ、素より出來事は  
江戸なれば、柳生但馬殿も一入これには係合なり、就いては一  
層の御盡力も致されたことゆゑ、江戸表へ願出して、將軍御膝下  
の空地を借用いたし、仇を討ちたいと申しした時は如何爲召さる  
か、豊前サア、その儀は………主計然らば豊前小倉へは、當地より問  
は隔るといへど、同じ九州の地續きなれば、岸柳にして見れば、  
何程か心強し、また武藏にして見れば、遙けき江戸を離れて小倉  
領に参り、父武右衛門は小倉家より些か扶持をせられ居ると雖も  
これとても別段に審中と定まつた譯にもあらず、然すれば小倉領  
に於て地を撰み、その地を借用いたして、仇を報はせることが當  
然のやうに思はれる、また岸柳の門人師を慕うて別れを告げたり



者あらば、小倉へ参つて別るゝとも、別段然のみ遠方といふにも  
あらねば、便利も至極宜しからんと存するが、何うあつても御當  
國に引寄せんければ、仇は報はさぬと言はるゝのでござるか、  
豊前「先づこの儀は主君忠廣公に於かれては、何うしても熊本へ  
引寄せて勝敗をさせたきやう仰せらるゝ、主計「その儀なれば手前も  
毛利家の使者に参つた者でござるゆゑ、強ひてこの事を募り、御  
當家と毛利家とに於て、不和を生ずる事あつても宜しからず、  
として主家に不和の生ずるやうな事を爲出さんも甚だ不忠の至り  
この上は江戸表へ伺ふのほか致方これなく候へば、立歸つて仰せ  
の趣を主人大膳大夫殿へ申上げることとござる」と若くしき顔を  
致して、飯田豊前を院付け交したるところは、前にも申上げまし  
た通り、老年に似合はぬ勇氣、威あつて猛き中々の人物でござい  
ます、そこで飯田も「江戸表へ伺ふことあれば、御勝手召さ  
れ」どの拾言葉、そのまゝ別れを告げまして、白井主計は夜に日

を續いて、熊本を出立に及び、中國に立歸り、直さまこれより毛  
利大膳大夫殿へ申上げますと、長州公もいよ／＼勘辨ならぬと  
御立腹の餘り、小笠原家及び分家甲斐守殿とも御相談の上、三家  
より願書を認め、急ぎ江戸表へ早打を以て訴へることと一決しこ  
れより御老中御月番秋元但馬守殿へ願出づるといふ一段てござい  
ます。

第 八 回

さて公儀に於きましては、苟且ならぬ長州、小笠原兩家よりの願  
出て、老中立會の上にて御覽になりませんと、早速評定席へ持出  
し、願上げ奉り候ふ、一這回宮本、佐々木と申す者、敵討一條につ  
き、加藤家我儘なる事を申立て候ふ間、何卒御公儀の御威光を以



て、加藤家へ御理解下し置かれ、長州領分に於き、勝負相成るや  
う、偏に願上げ奉り候ふとございます、また別紙には小笠原大  
膳大夫の手續書が附いて居りますから、これを一々讀んで見ます  
ると、何うも御月番御老中方も御心配でございます、板倉内膳正  
松平伊豆守、青山大藏大輔、永井信濃守等、天下の役人掛りの方  
々御評定の未如何いたしたものであらうといふ、この時板倉内膳  
正進出でられ「他人は卒ざらずこの板倉が存ずるには、假令加  
藤家が將軍家に御縁これあるとて、捨て置いては天下の政治に關  
るにと、これは長州の願ひまたは加藤家の言分、何れも立てゝも  
公平にあらす、只出來事のあつたる小倉領を以て、仇を報はする  
かた至極穩ならんと存じます、各々の御意見は如向でござる」と  
申出でますと、他の方々に於かれまして「何さま板倉殿の仰  
せ、至極御有理、吾々もその儀至當の事と存じ候ふ」とありませ  
是にて御月番秋元但馬守殿より、三代將軍家光公へ上聞に達しま

した、するど家光公の仰せられますには「成程寄合の上汝等が  
取極めたる通り、徳川家に縁あるとて、遠慮するには及ばぬ、忠  
廣へ篤と理解を致し予が名代として秋元但馬、汝に申付くるから  
肥後の熊本へ罷越し、這回の仇討は、速かに小笠原領のうち、何  
處か場所を撰んで、仇を報はす方當然なり」との仰せが下りまし  
た、是にて評議を一決いたし、そこで秋元但馬守殿、將軍御名代  
の御請を致して、直ちに御屋敷へ引取り、支度を調べ、僅かな家  
來を引伴れて、江戸表を御發足、道中大急ぎにて、播州姫路まで  
御出になりました、この事天下に隠れなく、諸大名方の耳に入り  
這回の願ひ御許しになり、いよ／＼仇討と定まることなれば、双  
方聞えし宮本、佐々木、どうかその勝負を見物致したいものと家  
中のうち誰れ彼れと言出す者もございます、それ／＼主公へ願出  
して相待ち居りますことゆゑ、天下の老中、秋元但馬殿が、將軍  
の御名代として姫路へ參られたと聞くなり、直さま當國の城主本



多家より、家臣を以て挨拶に差遣し、旅宿にて、饗應を致しました。この御上使御苦勞千萬に存じ奉る、前代未聞の仇討にござ候へば、當方よりも私元殿道中警固の爲めとして、二三の者を差加へ且つは仇討の次第見物をも致させたく候ふ。このこと、秋元家は「開は辱なく存じまする、然るべきやうとのこと、ございます。なんの万公の警固であるものか、お前方は敵討が見たいから附いて来るのであらうとは思召したなれど、世に聞えたる武術家同士勝敗如何に見物したいといふは、武士に取っては敢て無理ならぬ。ここでございますからそこで望みに任せましたのでございます。ア本多公の家臣では、吾れも行きたい此方もと言争ふうち、御前は荒木又右衛門と御定めになりました、依つて荒木は喜んで御上へ御禮に出ました主公又右衛門、其方に命じたのは別儀でない、この仇討につき、岸柳も聞えたるころの者ゆゑ、亂暴の舉動は致すまいかなれを、一命を安くと喜んで捨てる者は、大平の世

とてもあるまい、殊に加藤家の老臣に飯田豊前といへる者あり、この者至つて候悪奸智にたけたる者ゆゑ、或は武藏に害を與へんとすやも圖り難し、捨て置くは不惑の至りであるから、倘し卑怯の舉動等をこれあらば、武門のならひ、苦しからぬに依つて、度加勢を致して、師たる嚴流の仇、石川の修羅の妄執を晴さすやう、武藏に力を添へて得させよ」との仰せでございます。又右委細承知仕りました。是に於て荒木又右衛門はいよ御老中、秋元殿の供を致し、豊前の小倉へ渡ることになりましたが、この又右衛門は武藏どの初見參、仇討に至つて武勇を奮ひ力を添へること、相成りまするが、開は後のお話さて此方は追々近國の大名方聞傳へ四方遠近の差別なく噂の立つたのでございます。近き處の方々は、我れ一と仇討の見物にと、仕舞には薩摩邊りより御出でになる位、皆長府領、小笠原領のうちには旅宿を取つて、敵討の當日を相待ち居られます。そこで毛利家に近しく不願立交つて



居られまする方々の御名代は、何でも好い様敷が取つて貰ひたい  
と、それ、長府へ手を入れて御頼みになるといふ、大變な騒ぎ  
でございませぬ、それはさて置き御老中秋元殿は、先づ長府へ向け  
て御着になりませぬれば、直ちに御本家大膳大夫殿御名代も其處へ  
見えて相待ち居られますることをゆゑ、極く丁寧に扱ひ、豊浦郡府  
中の御城内へ御案内を申上げ、甲斐守殿御挨拶あつて、「御苦勞千  
萬に存じ奉ります」秋元殿も御挨拶済みまして、但馬、誠に這回は甲  
斐殿にも御迷惑、殊に貴下御本家たる毛利家に於ても御迷惑、眞  
以て御氣の毒に存ずる、併し武藏、岸柳の兩名は何處にありませ  
るか、甲斐、それは小倉領に居ります、但馬、左様か、然らばこれより小  
倉領へ渡つて、兩名の者に會ひ、篤と事情も聞糺したい」とのこ  
とに、そこで長府から御案内が附いて、内裏の濱より御座船を仕  
立て、これへ向けて御名代秋元公を御載せ申し、海路充分に警衛  
をして小倉領へ渡りました、うまく行つたのは荒木又右衛門でこ

ざいます、姫路から御供をして参りましたから、何處へでも附  
て行けます、至て秋元公も身が家來といふやうな遠慮にせず、側  
引付け、御置きなされるので、天下の御中老たるべき御威勢のある  
秋元公ゆゑ、怖い恐ろしいとは思召しませぬが、随分加藤家には  
亂暴なるところの者もこれあるゆゑ、萬一斯かる者共道中に於  
て、如何なる事を爲出さんか、圖り難く、然ある時は先づこの又  
を一人引付けて居れば、千萬人にも優る、便りとなると思召し、  
そこで荒木々々ど仰せられ、話相手になさるから又右衛門も亦大  
膽不敵にして、物事を恐ろしいの怖いのと思ふやうな人間ではご  
ざいませぬから、秋元公が御寵愛をなさるを幸ひに、道中の御供  
かた、姫路から此處まで参りますにも、我主人の如く思ひ、  
御側を離れず附いて居ります、参りませぬ、小倉領に御着船になり  
ます、直に小笠原の御名代も出迎へになりまして、最も町  
に城内へ御案内、秋元殿は二三の者を引連れ、荒木及び他の者は



宿元へ留め置き城内へ御出でに相成りました、大膳太夫殿御面會  
になりましますと、御名代にむかひ厚く禮を述べられました、但馬少々申したい儀もこ  
の上は佐々木、宮本の兩名をば呼出し、但馬少々申したい儀もこ  
れあるゆゑお取計ひを願ひます、大膳御有りでござります、これ  
より早速呼寄せませう」と是にて使ひの者をば宿元へ遣し武藏、  
岸柳の兩名を、小倉城へ呼出しました、尤も多くの役人前後を取  
捲き伴れて参りましたが、秋元公は武藏にむかつて、將軍家の台  
命なる由を述べられました、武藏は厚く御禮を申上げ、また岸柳  
にも將軍家の台命なる由を仰せ聞けられその上申さるゝには但馬  
汝今回の一儀承知を致して、武藏と尋常の勝負を致すのちやのウ  
他に異論はないか岸柳何事もござりませぬ、運を天に任せて、勝  
敗を仕る心成にござります、但馬、左様ならば尋常の事である、  
其方は熊本加藤家に於て、何ぞ大恩を受け、且つは加藤家に飽く  
までも盡さねばならぬといふ程の義理合があるのか岸柳御意にこ

ざります、只手前は大夫の飯田豊前殿より十人扶持を賜り、自分一  
人だけは樂々と綱口を凌ぐだけの扶持は、御家老の御一存を以て  
頂戴いたし居ります、敢て忠廣公に仕へ、別段何役を勤めたこと  
いふ事はござりませぬ、但馬、ム、ム、して見ると、日々出仕を致し  
て、主家の手直しをして居つたといふ譯ではないのちやのウ岸柳  
素よりのとでござります、但馬、して門人共は町人が多いのちやのウ  
岸柳左様でござります、但馬、熊本の町に住して居るといふ  
だけのとで、家老豊前の一存を以て、其方の道場へ扶持を致し、  
早く申せば、家老飯田方に入を致して居るといふだけの事、ちや  
のウ岸柳仰せの通りにござります、但馬、然らば此方が面前に於て、  
その通りを認め名前を記し印を捺して差出せ、これは別に支の  
ないこととでございませぬから、岸柳も「委細承知いたしました」と  
早速その趣を認め署名捺印の上差出しませした、なか、この岸柳  
といへる者も世人は悪人のやうに申しませすけれども、畢竟武藏の



せんで岸柳は後日加藤家の断絶の筒條に  
てせん、後日加藤家の断絶の筒條に  
方共は下れといよ、  
原毛利の手にて、番をさせるとに  
公は倉を御出立になり、肥後國熊本へ御立越えの上、  
殿に面會を致され、三将軍家光の台命に依り、  
したる老中秋元但馬守殿「推して言葉の出でさ  
理はございせん、この時秋元但馬守殿「推して言葉の出でさ  
以上は承諾いたされ、小倉領に於て、宮本、佐々木の勝敗は御  
承知なす、承諾いたされ、小倉領に於て、宮本、佐々木の勝敗は御  
御覽なす、承諾いたされ、小倉領に於て、宮本、佐々木の勝敗は御  
ば、只平伏いたし、奸智に長けたる飯田豊前も、將軍の御名代とあれ  
せ、平伏いたし、奸智に長けたる飯田豊前も、將軍の御名代とあれ  
せ、平伏いたし、奸智に長けたる飯田豊前も、將軍の御名代とあれ  
代、平伏いたし、奸智に長けたる飯田豊前も、將軍の御名代とあれ  
まで仰せ下さる、このなれば、此方に見分て、些かも見届けて、引取らうと

遺恨を以て、石川群、東齋を撃つたるは、成程卑怯に違ひがござい  
ません、なれども、然のみ何處々々まで、極悪人にて、大名の家  
を覆すの、或は己れ榮耀華を、して永く暮らさうといふやうな、  
別段所存のあるもの、ではございませぬ、本加藤家の縁者  
か、何うだとかといふ事を言へば、肥後の熊本、藤家、御迷  
惑、かけてもならぬといふ、其處は武士だけ、藤家に對して、  
者、依つて何處までも加藤家の家來でないといふ事を申出で居る  
た、飯田豊前は己の反逆を以て片腕にせんければ、ならぬと思ふ  
柳、ゆえ、一人で意地張り、主家横領の兆しのある位、な曲者で  
ざい、すから、私計の身、所謂、悪い番頭を、持て、それ看破ら  
だ、の、詰り、忠、殿、の、身、に、所、謂、惡、い、番、頭、を、持、て、それ看破ら  
町家の申すは、此處でござい、す、己の家の潰され、る箇條の一分  
に、出、る、と、申、す、忠、廣、殿、の、氣、の、付、か、な、い、だ、の、は、誠、に、殘、念、な、事、で、ご、ざ、い、ま  
ます、併し、これ、は、武藏の仇討に就いて、關係する事ではござい







りまする 但馬「それは然るべきよう」と是に於て早速御名代秋元殿  
は御引取りに相成りまするや否、御一泊の上、翌日宿元をば發足  
いたしまして、小倉領へと御引取りになりました、此方は小笠原  
毛利家にては、御名代の返事を相待ち居りました、敗をさせたい、  
に成り但馬加藤家承知に及び候ふ此上は場所を取極め日を定め勝  
敗をさせたい、各々方にも考へが付きましてござるか、この時  
小笠原大膳殿は「然ればでござる、手前領のうち豊前島と申す  
處これあり、離島にござれば、至極の場所と存じまするゆゑ、恐  
れながら此處まで御出張下されたく、この處にて勝負をすれば  
依估の沙汰もなく、至極の都合ならんと存じます、但馬大島に  
れは有理の事である、何れから参るも便船を求め渡らんければ相  
成らぬとすれば、誠に都合宜しからん、此回は多く諸大名方から  
も、世に聞えたる武術家同士の果合とて、見物に來て居る者も數  
多、これある由、地續きの處ではその群集も一方ならぬやう思  
るも

から、一々船にて渡すこと至極宜しからん、然らば充分に何うか  
御用意を下されたい、大膳その儀は素より長府甲斐守殿とも相談の  
上、大膳用意を仕り居ることとてござります、但馬それは行届いた  
こと、然れば來る七月二十七日を以て、いよいよ宮本、佐々木の  
勝敗といふ事に取極め申さん」と是に於て小笠原家より早々豊前  
島へ多くの人数を渡し、その場所を取極めることになりました、  
當日は長府甲斐守殿御領分より、追々と船で渡る者もあり、小笠  
原領よりまた渡る者も澤山ございます、なか、町人などが拜  
見をするやうな譯なものでもございませぬ、前にも話申上げた通  
り、此回の果合に就いては、追々と聞傳へて、諸方から見に参ッ  
て居るところの人々、それ、船にて豊前島へ渡ることゝなりま  
した、掛りなれば長府本家、萩城の主御名代、府中甲斐守殿御名代  
小笠原大膳殿、大膳殿御名代、その他、江戶表より將軍御名代、秋元、但馬  
守殿、御棧敷は別に設け、その棧敷の下には、荒木又右衛門が控



へることになり、その他備前、作州、等の名代方、皆悉く  
それ、武藏が決してこの場所へ上ることにはならぬに依つて、船中に  
控へ居て、陸の様子をば見よとのこと、この時加藤家の名代飯田  
豊前は、岸柳の門人及び國許より召伴れ参りまし、たるところの若  
武士の向見ず命知らずの者共を打集め、凡そ五百名ばかり、數艘  
の船に載せて、海邊に控へさせてございます、いよ／＼となる時  
は飛出し斬込めといふ豫て支度のございます、ことゆゑ、それ  
その用意を致し居ります、尤もその前夜すなはち二十六日の夜  
よりこの海邊に來り、陸の様子に充分に見積り、いよ／＼となれ  
ばこの處より上り、此處から斬込んで、偷しも武藏がこの手へ逃  
げんとすれば、此處にて抑へんとまでの手配を致し、目釘を濕し  
柄の湯になるばかりに握りしめ、用意をして相待ちます、折柄聞  
ゆる鯨波、刻限の太鼓をドン／＼と打鳴しました、いよ／＼これ

第 九 回

からが豊前島大仇討の事話に引移ります、が一ト息いたして、次  
に。 頭は人皇百九代、明正天皇の御宇、寛永七年七月二十七日、空に  
點の曇なく、秋の初めといふなれど、その暑きこと一方ならず、  
處は名に負ふ九州、今にその名を殘しける豊前島事、岸柳島と後  
に呼びましたる古今の場所、西は玄海灘、東は周防灘、その真中  
にあつて、廻ヶ瀬戸と稱へます、西は玄海灘、東は周防灘、その真中  
みまして、竹欄を結び、三方に棧敷をかけ、一方は人の通路とし  
て、正面御名代の御棧敷には、葵の御紋を染抜いたる幕張は、か  
ねて長州公より御用意の幕を以て張詰め、秋元但馬守泰朝殿、左  
右には近習小姓七八名を従へ、祐筆二名を控へさせ、萬々今日



有様を控へますことにございます、右座には毛利甲斐守光廣公御名代毛利  
の御様敷には加藤家御名代飯田豊前、小笠原家御名代小笠原兵部  
の御様敷には諸方よりの御名代方、何れも威儀を正して  
さへ控へに相成つて居ります、またその他聞傳へて、それから  
への出入町人、それ、資縁をまうけて、追々見物に出掛ける  
者、人の山をなすばかり、この時何思ひけん飯田豊前は、合圖の  
大鼓を聞くと均しく、機敷より下つて、床机にかゝり、岸柳を  
許に呼寄せ豊前如何に佐々木、汝久しく熊本城下にあつて道場を  
開き、敷多の門人に武術をば指南いたし居り候ふところ、城下町  
人、澤田左衛門の一條につき遂に石川群東齋といへる者に遺恨を  
相合み、間達の生じ及傷に及びたるよりして、今日その門人たる  
宮本武藏、當地に罷越し果合を願出でたること、これ双方に一理

ある儘なれば、汝の爲めには門下の敵また武藏の爲めには師の仇  
畢竟遺恨は五身々々なり、併し恐れ多くも將軍家より御名代の罷  
越され候ふ上は、如何に加藤家に於て、威勢を以て拒まんとする  
も、この儀届かざることゆゑ、悪しからず思ひ、今生の暇乞ひと  
して飯田豊前上の御名代に罷越した、遺言もこれあらば、聞届け  
て得さする、何ぞ申す事はなにか岸柳素より人を殺めましたる  
大罪人の岸柳、石川群東齋の門人宮本武藏が師の敵として罷越せ  
しは、これ當然の理にござります、私澤田屋空左衛門の仇として  
武藏を討つべきなれば當然なれど、その師たる群東齋を撃つ  
れば、誰が聞く所にしてもこれは僻言に致し、その心得違ひ、是  
非もなきことにござります、豊前イヤ汝はなかく、天晴れの者であ  
る、併し主君忠廣公は、汝も知る如く、性質豪膽なる方ゆゑ、飽  
くまでも小倉領に於て、武藏と汝の勝敗の儀は、心中不満を懐か  
るゝといへど、將軍の御名代に對して、左様な事を申す事もな



らず是非なく今日の事に及ぼしたのである、然りながらこの海邊に汝の門人その他加藤家の藩士誰れ彼れといへる者差し控へ居る素破其方の危うき事あらば斬つて出て武藏をばなき者に致す心底なれば、心丈夫に勝負を致せ岸柳誠心に思召しは辱なく存じ候へども、岸柳その儀は甚だ快よからず、撃つ討たるは時の運、決して私共門人に相忽の事動これなきやう、何卒太夫より仰せ聞け下し置かれまますやう」此處等を思ひますれば、岩柳も立派な者でございませぬ豊前ア、汝は天晴れな者」と言ひやうがございませぬか見物は「暑い」と頭が焦げるやうだ、勝負は如何だ、始めに大勢のんか、ワア〜と前後探はず騒立てるは、町人の常でございませぬ、今日非常を警むる役人、六尺棒を携へ榎の側に來り「町人共騒ぐナ森しいぞ、静かに致せ」と言つても聞かぬは下方の常、是非がございませぬから、榎の間より棒棒を出して突立てますから

そこで町人も前に居る者は災難でございませぬ「ヤイ、背後から喧々騒ぐと前に居る者は痛い目に遭ふぞ静かにしろ」と言ひながらも騒いで居りまするうちに、今日第一番の係役として迷れられぬは、柳生の門人浪人渡邊久藏保にございませぬ、この仁は第一の關係人、ドン〜と御太鼓が二ツ鳴りまします、相も變らず奇妙な浪人姿で大小刀横たへ、中央に出で、突立ちました、時に岸柳はツカ〜と出て参り岸柳渡邊氏、這回の計ひ、御苦勞千萬に存じまします久藏これは〜佐々木氏、大仰なる事に相成つて、誠に其許も御迷惑ならん岸柳イヤ身に取りまします、假令一命棄てるとも、前代未聞の晴の塙所、露些か、心残りはございませぬ、本望でござる」そこで禮を述べて岸柳は引取りました、跡へは宮本武藏も罷出でまして、同じく渡邊久藏に一禮を述べて、これも退り双方控所へ引取りました、渡邊は御名代の方にむかひ久藏最早双方支度調ひましたれば、合圖の御太鼓と諸共に、勝敗取極めまし



ては如何にござりますや、但馬渡邊大儀、と御名代より御聲が掛り  
ました、「御免」と双方へ目禮をなし、久蔵は控所に引取りました  
なれど油断なく一番の係人でございますから、何方にも卑怯の舉  
動、これなきやうと、瞬きもせず見て居りまする、太鼓の音と諸共  
に、西の方の休息所より佐々木玄東齋岸柳は、澁染の帷子に小倉  
の野袴、白布をもつて袴を十字に縫取り、同じく白布で後願巻を  
締め、小紋襦袢には小紋の足袋、裂緒の草鞋を高く結上げ、下  
には薄綿の入ったる筒袖を纏ひ、覺えの大小刀を横たへまして、  
徐々、其處へ出で、御名代一同にむかつて目禮を致し控へますれ  
ば、東の休息所よりは、徐々と出でましたる宮本武藏の姿を見ま  
すれば、水色の帷子に菖蒲草緑取の野袴、尤も下には劍術の稽古  
襦袢を着なし、同じく白布で袴願巻、これまた小紋の脚絆、小紋の  
足袋を穿きまして、裂緒の草鞋を穿ち、腰に穿したる大劍は、三  
條小鍛冶宗近、小刀は不動國行、これまた御名代一同に目禮

致しました、この時中央にありましたる渡邊久蔵、「双方御用意よ  
くば、尋常の勝負を致されよ、兩人委細承知仕りましてござります」  
と一足背後へ退るところへ、小笠原家の家來、四方に土器を二ツ  
載せ、水を汲んで持つて出でました、同じく兩人土器を取つて、  
その水を半分飲み、半分残して土器諸共大地に投捨て、四方は双  
方共に足をかけて打潰しました、が「討つ者も討たるゝ者も土器の  
くだけて後には土となりける」聽てドン、と御太鼓の音に、兩名  
は背後に退り、運を天に任しての勝負、武藏、佐々木岸柳覺悟は好  
か、岸柳言ふに、及ぶ宮本武藏、用意が好くば、卒さ武藏、卒さ」と双  
方共に柄手をかけ、拔放すや否、渡邊久蔵はその場を背後に退  
り、他に觸らず、方、の様子を眺め、注視して居りまするうちに、ス  
ラ、と、抜いたる利刀は、何れ劣らぬ名刀と名刀、双方聞えし古今  
の達人、互ひに打物、丁々、心懸して居ますから、急に、只武藏は岸  
柳の燕飛の太刀に少しく心懸して居ますから、急に、只武藏は岸



みませせん、此方の名代のうちよりも本多の名代荒木、森の名代高木、塙、何れも目を澄まして居ります。危哉、宮本、二ツにもな  
と見えしが、丁ど斬込む佐々木の太刀先、危哉、及び群れ居る役  
人、冷汗を流して見物をして居られます。御名代、武蔵も然物、受流し  
再び斬結んだる折柄、岸柳あせつて捲上ぐれば、武蔵の右に持て  
る太刀は、空中に跳ばされ、斬込む左剣を岸柳は、これまた一  
心の籠めて捲落しました。「ソレ危ない」と一同聲をかけるうちに一  
方の道を取つて武蔵は、タジ「危ない」と追立てられ、渡邊の方へ  
追詰められて参りました。岸柳望んで「ヤツと打込むを岸柳は、早く此方に干  
しある權を手に取り、岸柳望んで「ヤツと打込むを岸柳は、早く此方に干  
りに横に拂へば、斬込むは二ツに斬れました。武蔵は左右の手を取直  
す、岸柳は隙さず斬込んで参ります。武蔵は左右の手を取直  
地上を一つ蹴るや否、清水の観音の利益に依つて、夢中に習ひし

飛切の術、忽ち武蔵は飛上りました折柄、岸柳は隙さじと權を拂  
へば、危哉、武蔵の右の足は、斬落されたかと思ふばかり、權長に  
穿きなしたる高蒲草の野袴の裾を拂ひました。折柄、岸柳の頭上を  
目掛け、武蔵は右手に持つたる權にて、發矢とばかりに打割れば  
眼眩んでドンとばかりに打倒れました。この時、數万の見物は「研  
つたりや研つたり、討つたりや討つたり」と暫時は鳴も静まりま  
せんでございませした。武蔵は莞爾と笑を含み、「我望みこゝに足り  
たり、アラ辱なや清水の觀世音菩薩」と手早く先に取落しませした  
る太刀をば拾取り、岸柳の喉元に押當て、師匠の敵思ひ知れ」と  
ブツブツ絶息を刺しました。時に此方の濱邊に繫いでござりまし  
た加藤家の用船のうちより、ワツと言ひさませ岸柳の門人輩、閑の  
聲を爲つて、銘々支度充分に、武蔵を望んで八方から追取圍み斬  
つてかゝりませした。加藤家の者を追拂へよ」と下知の下より「心得ま  
誰そ居らぬか、加藤家の者を追拂へよ」と下知の下より「心得ま



思へど、飯田豊前忽ち棧敷より飛下り豊前一同の者、気が狂ひしか  
 か愚か者めが如何なれば斯かる暴動を致すぞ、控へ「ッ」と大音  
 聲に呼ばはり睨付けました、その實申合せたところ、此の腹から制す  
 の者は、味ひがあるの、九州人の性質、どこから、控へて貰ふより向  
 の者は、味ひがあるの、九州人の性質、どこから、控へて貰ふより向  
 暴れ立てます、これ九州人の性質、どこから、控へて貰ふより向  
 ッて貰ふ方が却ッて好い位な了簡で、塙、高木、荒木の人の面  
 白氣に打立て蹴飛ばし、看るうちに大勢の者は、命に別條は  
 ございませぬが、片輪の数は知れぬほど出来ました、御名代は棧  
 敷より下ッて大音に制されまする、各々、主家の大事を知らぬか  
 辱なくも時將軍の名代たる秋元但馬、この處に出張いたしたり、  
 順序を経て仇討を致したるに、何を遣恨に思ふて左様な暴動を致  
 すぞ、汝等は今日暴れに参ったのか、武藏は但しは主家の噂か」と言  
 へども聞かず暴れて居ります、武藏は但しは主家の噂か」と言

した」とあつて駆出し上りしたる森の名代塙兵藏、高木右馬助、將  
 軍御名代の御聲のかゝりし上からは、打斬つても氣遣ない、此處  
 を宮本先生に加勢の時なり」ビヤンヤと言ひながら陸に上つて斬  
 り始めました、この時荒木又衛門は「ヤア」塙、高木の方々、  
 粗忽の舉動をして、首などを斬る事は無用、又右衛門の働きを御  
 覽じろ」と鯨骨の軍扇を取つて、手許に徐々罷越し、急ぎも騒ぎ  
 もせず、加藤家の人々に打向ひ、ビシリ／＼打立つるその凄まじ  
 さこそ一方ならず、これが爲めに諸方の御名代の方々、銘々大小  
 覺えのある仁ばかりが今日来て居るのでございますから「あの  
 れ卑怯な加藤家の奴輩、今日をいつぞと心得居るぞ、辱なくも將  
 軍家御名代として、秋元但馬守殿迄々この九州まで御出頭ありし  
 その眼前に於き、斯かる不埒の暴動をなすとは、返す／＼も無禮  
 の至り、卒で我々「が」と寄ッて集ッて追立てましたから、無念  
 誤突く時に於ては、何程の死が出来るやも圖り難く、無念には



如何して居るかと思はず突立ちながら、ヒヨイツと此方を見ま  
すと、如才はございませぬ、上ツた者は荒木を始め皆々に打立て  
られて居ります、そこで有馬喜兵衛は、向ふの船へ乗込んで打  
斬つた数もなか、少ない事ではございませぬ、武藏「コリヤ、喜  
兵衛、最う好い、何をして居る喜兵衛、イヤ上へあがれば加勢が  
多いから、思ふやうに鉢が廻りませぬ、船の中へ乗込んで行け  
ば、向ふ奴は皆仇敵、私の身さへ避けて先方を殺せば同士打ち  
ございませぬから、今日ほど得心の入つた徳さはございませぬ、  
武藏「最う好い、喜兵衛、左様か、ア、残念な事だ」と言ひながら陸  
へ上つて参りました、武藏して喜兵衛、命は取らなんだか喜兵衛、木  
先生が大音聲に命を取るナ、命を取つては後の妨げと言はれまし  
たから、腕や足を打盡した奴はあります、首を斬つた者は一人  
もござりませぬ、武藏「ム、出来した」とこの時名代秋元殿は「彼  
れは何者であるか宮本武藏、御意にござります、手前が門人有馬喜

兵衛と申す者でござります、但馬「ム、ム、其方の門人なれば、何故  
仇討の場所へ呼寄せなんだ、武藏「御意にござります、恐れ多くも天  
下の御名代、毛利御兩家、小笠原その他諸侯方御立會ひ下され、  
能々御名代を下し置かれたる今日の晴の果合、私の門人などを手  
計に引寄せ、加勢をさするなどいふは、限りなき無禮の事でござ  
りませぬ、必ず船より上ることにはならぬと申聞け置きまし  
てござります、但馬「ム、ウ、ア、立派な事である、それに引替へ何  
百といへる人数が船より上り、尋常の果合の場所に斬込むなど  
は、近頃行届いたる政治である」と御笑ひになりました、飯田豊  
前は面を脹らし、豊前「誠に痛み入つたる事にござります、九州産れ  
の者共は、粗忽の事ばかりを致し、誠に豊前面目次第もなきこと  
にござります、但馬「イヤナニ飯田、御身は國許で三万石を領さる、  
老臣であるナ、豊前「御意にござります、但馬「少と省儀れよ、其許の詞  
する言葉を用ひて、一言の下に控へんければならざるを、却つて



聞入れずして、ますく、劇しく亂暴をなすなどは、近頃但馬見苦しい事である、言ふうち此方は追々と役人出で、取録めにかゝりましたから、是に於て加藤家の者共も、鎮まることゝなりましたそこで豊前は何とも言ひやうなく豊前の上は立歸り主君忠廣殿へ申上げ、屹度戒むることにござります但馬それは其許の了簡次第、此方は今日見分の役目に罷越した者、愼く仇討相濟みし上からは、江戸表へ引取ればそれまでの事である豊前恐れながら御名代まで豊前御願ひの儀がござります何卒この事を、江戸表へ御引取りの際は、將軍家へ御沙汰これなきやう但馬イヤその儀はならぬ、此方一人包まんとするも、數人のこの事をば見物を致し、諸國より名代の方も數多來られ、殊に祐筆まで引寄せて、事の次第を認めさしたる上からは、將軍家へ包みを申上げぬといふことは相成らぬ豊前「ハ、ツ」と流石の豊前も歎息を致しました、これ加藤家の断絶の一ヶ條に上るも、有理なことをございます、飽くま

でも豊前の致方は悪むべきところ、武藏は御名代の前に來り武藏格別の御計ひを以ち、速かに運に乗じて師匠石川嚴流の仇を報ひこの上もなき満足にござります但馬目出度いく、誠に其方は尋常なことである、一ト先づ小倉城下へ引取って、緩々休息を致すが好から、是に於て秋元公の御供を致し、小笠原御名代毛利兩家の御名代と諸共に船に打乗り小倉へ引取りましてございます、岸柳の死骸は係役人より取片付を致され、只豊前は門人等の死骸となりしものは仕方がございませんから皆水中に投入れて、手傷の者はそれ介抱をさせ、情々として船に打乗り、便利宜しき方まで引取り、熊本へ立歸ることになりましたが、これ忠廣疳癪を起して、亂暴をなす甚然し加藤家断絶のお話は別にございますから、委しく申上くと餘談に渡りませぬ、こゝにては預りと致して置きますさて此方は御一同、小倉へ着を致しますと、その夜武藏は宿元に引取り、支度を改めて、小笠原大膳大夫殿へ御



目通を致し、厚く御禮を申し上げました大膳名代兵部より事柄は委しく聞取った、今日の働き天晴れの腕並、無ぞや汝が父武右衛門もこの事を聞くならば、満足に思ふてあらう、予も喜ばしきことである、緩々休息いたせ、併し忠廣豊前と心を協はせ、今日の舉動、近頃以て穩當しからざる致方、此方に於て掛合ふべき事は種々これあれと、御名代たる秋元殿の思召しもこれあらんに依つて當家に於て事は好まぬ、先づ其方の身に事さへなくば重疊である、城内にて休息を致さぬか武蔵ハ、ツ、此は有難き儀にござりますれど、御名代御逗留中といひ、毛利御兩家の前もござりますれば、事予つて仕舞ひまするまで、町宿を願ひたうござります心安く休息を致せ、是にて有難く御禮を申上げ、武蔵は宿元へ退りました、その宿元の戸外には、多くの役人晝夜交代にて番を致し居ります、これは加藤家より刺客などを差向けざる様にと

いふの用意にございます。

第 十 回

扱ても此方は愈々小倉へ引上げた銘々の御名代はそれ立歸ることになりましたが、塙兵藏、高木右馬助などは、宿許へ参つて宮本武蔵に面會をなし、仇討の儀を祝し、酒宴を開いて別れましたが、茲に荒木又右衛門だけは跡に残り、夜中宮本の居ります宿許へ、お目に掛りたいとて出掛けて参りました、そこで武蔵は町亭に通し武蔵「サア何卒荒木先生、此方へ……」又右「この度は本懐を達しに相成り、お目出度こととござる武蔵、各方の御盡力に依りて、幸ひに危き所を助け、過分の至りにござります」と禮を述べました、この時喜兵衛は側に在つて喜兵「サア何卒荒木先生此方へ……」又右「御免下され」と荒木は座に着きましたが武蔵扱て又右衛門殿、御身は天下に聞えたる武術家にして、斯様なことを



置かるゝ方宜しからうと存じます又右「ハッ、大きに有難うござり  
 まする、あ、心添への段悉く存じます」と又右衛門は一禮述べて  
 そ、こ、て、宮本に別れを告げて、これ亦姫路へ引取ることに成りまし  
 たが、後、この仁は武藏の言葉に従ひましたから、大鯨は三池傳太  
 ありと云へ、小刀は思はしいのがございませぬから、態々探ね  
 て、遂に薩摩住人波平行安が鍛へましたる一刀を小刀として、  
 常に此刀を帯して歩きまされたが、只大刀と小刀とは、刀身は一寸  
 五分しか違ひませなんだから、見る者觸る者、その歩行様の可笑  
 しいのを笑ひました、櫻井甚左衛門の爲に寶藏院流の槍術の鎌に掛つて、  
 を報いし時、櫻井甚左衛門の爲に寶藏院流の槍術の鎌に掛つて、  
 大鯨の三池傳太を打折られましたが、果せるかな小刀なる波平行  
 安が間に合つたことございます、何うも名人の言葉と云ふも  
 のは、反古にならぬものでして、荒木は仇討濟んで後、感心をし  
 て、衆人に語つたことがあるさうて、

この宮本が申上げずとも、お辨へではあるかなれど、既にこの度  
 の勝負、手前若年の頃より、兩刀と云ふことに心を寄せましてご  
 ざりまするが、初めて今回に至つて、我が兩刀の用に足りること  
 を知りました又右「イヤ、嘗て承るに、戸田六左衛門先生の門人、  
 田宮左金吾と云へる者、左劍で受けるだけのことを縁出したとあ  
 りまするが、左劍で自由に斬込むと云ふことは、なかく出来  
 るものではござりません、宮本先生の兩刀は、實に自由の利きます  
 るには恐入つたることでござります、武藏「イヤ、それは少し仕れば  
 御身程の豪傑ゆゑ左劍も間に合はぬことはござるまいが、御身に  
 云ふて置きたいのは、平常は少しく不体裁うござれども、大鯨と  
 小鯨とは餘り違はぬものをば、差しなされ、莫耶の劍、天國の寶  
 劍と云へど、鍛治師が鍛へたものゆゑ、折れぬと云ふことは決し  
 て申されません、又右「如何にも仰せの通り……武藏「若し大鯨に事あ  
 る時は左劍が短ければ用には足りませぬ、常々の事はあ心に掛